

譯詩集

# 海潮音<sup>(1)</sup>

(1) 譯詩集。上田敏著。  
明治三十八年一〇月一三日、  
本郷書院刊。四六判。献  
辞・序・目次とも二七七  
ページ。

上田敏・上田敏譯

明治三十八年



(1) 中国の東北一帯をいう。  
当時この地方を舞台に日露戦  
争が行われていた。

(2) 当時鷗外は第二軍医  
部長として満州に出征して  
いた。

遙に此書を満州(1)なる森鷗外(2)氏に獻ず

(3) 「雨雲」と解する説もあるが(辰野隆『え・びやん』所収「雨の日」)、おそらく「天雲」の意であろう。

(4) 上田敏は何に拠ったものか明らかでないが、前田林外選訂『日本民謡全集(明治・昭和)』には、下総国玉造村の「香取神社祭獅子舞ひ歌」として、「大てらの香のけぶりはほそくともそらにのぼりてあまくもとなる」と載っている。

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて  
あまぐも(3)となる、あまぐもとなる

獅子舞歌(4)



## 序

(5) Provence. フランス南東部の地中海に面した一帯の地方。パリを中心とするフランス語とは異なる、いわゆるプロヴァンス語が行われている。

(6) 高踏派 パルナツシヤン(Farnassiens)の譯語。フランス一九世紀中葉に浪漫派に対する反動として起こった詩派。

(7) 象徴派 サンボリスト(Symbolist)の譯語。フランス一九世紀後半に起こった詩派。

(8) かぶら矢。戦いのはじめにかぶら矢を敵陣に射たことから、物事の最初をいう。

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンス(5)に一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩(さき)の高踏派(6)と今の象徴派(7)とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を翻(ほん)するに多少の變格を敢てしたるは、其各(おの／＼)の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜(へうぼう)する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢(かうし)(8)とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨(てうしんりやくこつ)の技巧實に燦爛(さんらん)の美を恣(ほし)にす、今茲(こゝろ)に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、ヱルレエヌの名家(こゝろ)之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對(むかひ)、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上になり、はたまたダンヌンチオ、オオパネルの詩に注げり。然れども又徒

(9) 奇聲 あやしくそびえ  
たっていること。

(10) 胸奥の絃 胸の奥にあ  
る琴の糸。人間の心に秘めら  
れている感じやすい情をいう。

(11) 怯 おくびよう。

(12) 黙移 暗黙の推移。

(13) 倉皇 あわてること。

(14) 弊竇 弊害のある点。  
「竇」は穴。

7

らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聲(9)の新聲、今人胸奥の絃(10)に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荊棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯(11)に非らずむば愠なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にヱルレエヌ、ヱルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の黙移(12)實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫺はざるを以て、倉皇(13)視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の銳きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徴候を呈しただらう。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇(14)に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュ

(15) ヤスナヤ・ポリヤナの老伯 領地のヤスナヤ・ポリヤナに住む年老いた伯爵の意で、トルストイのこと。

(16) 敬いし たってやま ないもの。

(17) かの世界觀 原始キリスト教的信仰に基づいて、素朴な生活を理想とし、無抵抗主義をとなえた、トルストイの宗教的・道德的世界觀。

(18) 評隲<sup>ひやうし</sup> 評しさだめること。評価。

(19) 明治三八年九月一七日から十一月二日まで「読売新聞」の「日曜付録」に、六回にわたり「乙巳文学」(暗黒なる文壇)を連載した中島孤島氏をさす。

ンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏<sup>この</sup>思想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳<sup>や</sup>を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯(15)が近代文明呪詛<sup>じゆそ</sup>の聲として、其一端をかの「藝術論」に露<sup>あ</sup>はしたるに至りては、全く贊同<sup>さんどう</sup>の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措<sup>きんぎやうそ</sup>かざる者(16)なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀(17)の一片に過ぎず。近代新聲の評隲<sup>ひやうし</sup>(18)に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本<sup>ひやうし</sup>の評家(19)等が僅に「藝術論」の一部を抽讀<sup>ちゆうどく</sup>して、象徴派の貶斥<sup>へんせき</sup>に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしなから、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意<sup>さんい</sup>を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉<sup>か</sup>りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ばざる言語道斷の妙趣を翫賞<sup>がわんしょう</sup>し得可<sup>う</sup>し。故に一篇の詩に對する解釋は人



(20) キリスト時代に最も盛んに行われたユダヤ教の一派の人々。イエスは木の派の偽善的傾向を攻撃し、彼らによって十字架にかけられた。

(21) この詩の鑑賞は、ヴィジェ・ルコックの『現代詩』に教えられている。

(22) 神聖な森。

各おの或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書96頁「鷺さぎの歌」を誦するに當てあたり讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽パリサイの徒(20)と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢をみの沼に綱うつ、名や財や、はた樂欲げうよくを漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃はだきて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬かうほねの白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に壓あきて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛たたへられ、或は空想の泡沫はうまつに歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに懂がる、哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心狀に至りては皆相似あひたり。119頁「花冠」(21)は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲げうよく」、「驕慢けうまん」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛たれ、齎たらす所只幻惑の悲音のみ。孤り此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑林をんりん(22)の樹間に「愛」と和睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香れいえんそかうの美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

(24) とざまにゆき、かうざまに  
あちらに行き、こちらに行き、  
しての意。以下の訓読は漢詩の逐語訳の例としてあげたもの。

(25) おほえのあきつな 大江朝綱 仁和二年（八八六）——天徳元年（九五七）。  
平安時代の学者。音人の孫で文章博士・差大弁・参議を歴任。後江相公と称する。以下の話は『今昔物語』巻第二四に出ている。

セッテイが伊太利古詩翻譯の序(23)に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲眇々。二月三月日遲々」を「とざまにゆき、かうざまに(24)、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱(25)が二條の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひたる所多し。

明治三十八年初秋

上田 敏

燕つばめの歌うた

(26) はつ燕 原詩ははじめの二行では「新鮮な三月の始め、おお燕よ」と呼びかけになっている。

(27) シモンズの英訳、From the quiet lands beyond the seaをそのまま日本語化。

(28) 春はじめて咲く花のにおいを捜し求めるの意。「古今集」巻一に「谷風にとくる水のひまごとに打ち出づるなみやはるのはつ花」とある。

(29) 原詩の意は「黒と白の衣装をきて、私たちの舞うところへ飛んでおいで。そして私たちを『春』で愉快にさせておくれ」。

(30) ともに上質の絹織物。原詩 Zendo は中世に用いられて上質の絹の薄い服地。

彌生やよひついたち、はつ燕(26)、  
海うみのあなたの静けき國(27)の  
便たよりもてきぬ、うれしき文ふみを。

春のはつ花、にほひを尋とむる(28)  
あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分そめわけ縞しまは  
春の心の舞姿(29)。

彌生きさくら來にけり、如月きさらぎは

風りすもろともに、けふ去りぬ。

栗鼠けこそもの毛衣けこそも脱はぎすてて、

綾子りんず羽はぶたへ(30) 今いま様やうに、

春の川瀬をかちわたり、

(31) 恋人同士が集まって遊んでゐるの意。

(32) この語法のくり返しは、「古今集」巻一七「紫のひともとゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞみる」をふまえていよう。

(33) 新妻のようにういういしい眺めだ。原詩にはなく、シモンズの英訳によつたもの。初出では「花妻」。

(34) 初出では「あれ敷かけのつぐみどり、あれなかに空にあげひばり」と行末に「り」の押韻を試みたのを、のちに修正。

(35) 原詩では「酷い風の口が巢を運び去つたのではないか」。

しなだるゝ枝の森わけて、  
舞ひつ、歌ひつ、足速の  
戀慕の人ぞむれ遊ぶ。(31)  
岡に摘む花、莖ぐさ、  
草は香りぬ、君ゆゑに、  
素足の「春」の君ゆゑに。(32)

けふは野山も新妻の姿に通ひ(33)、  
わだつみの波は輝く阿古屋珠。  
あれ、藪陰の黒鶉、  
あれ、なかに空に揚雲雀(34)。  
つれなき風は吹きすぎて(35)、  
舊巢へて飛び去りぬ。  
あゝ、南國のぬれつばめ、  
尾羽は矢羽根よ、鳴く音は弦を  
「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥よ、

(36) 「水干」は平安朝の公卿の着た日常服。また元服前の少年の晴れ着にも用いた。ここでは燕の羽の黒と白との色彩を、水干にたとえた。

(37) ヨーロッパの中世伝説「トリスタンとイゾルデ」のこと。

(38) 「しばらく止まっておくれ」という燕への呼びかけ。

(39) 「かづけ」は「かづけもの」の略。いただきものの花環。シモンズ英訳の「his shall be thy garland」を訳したもの。

(40) 牢獄ではない花獄。これも英訳の no prison mesh (牢獄におとしれるわけではない) をこのような意味のつづきの無理な表現にしたので、原詩からは離れている。

黒と白との水干すゐかんに(36)、  
舞の足どり教へよと、  
しばし招がむ、つばくらめ。  
たぐひもあらぬ麗人れいじんの

イソルダ姫(37)の物語、  
飾りあが畫けるこの殿どのに

しばしはあれよ(38)、つばくらめ。

かづけの花環(39)こゝにあり、

ひとやにはあらぬ花籠(40)を

給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、

まことは「春」のめがみ大神おほがみ。

「ガブリエレ・ダンヌンチオ——『フランチェスカ・ダ・リミニ』」

聲<sup>もの</sup>  
曲<sup>のね</sup>

われはきく、よもすがら、わが胸<sup>うへ</sup>の上に、君眠  
る時、

吾は聴く、夜<sup>しづけき</sup>の静寂に、滴<sup>したたり</sup>の落つるを將<sup>はた</sup>、落つ  
るを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間<sup>たえま</sup>なく落つるをきく、  
夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひとり  
して。

『ガブリエレ・ダンヌンチオ——『シオパン即興曲』』

眞ま  
晝ひる

「夏なつ」の帝みかどの「眞晝時ま ひるとき」は、大野おまのが原に廣ひろがりて、  
白銀色しろがねいろの布引ぬのびきに、青天あをぞらくだし天降あもりしぬ。  
寂じやくたるよもの光景けしきかな。耀かやく虚空こくう、風絶ふうえて、  
炎ほのほのころも纏まとひたる地つちの熟睡うまいの靜心しづこころ。

眼路めち眇茫べうぼうとして極きはみ無く、樹蔭こかげも見えぬ大野おまのらや、  
牧まきの畜けものの水かひ場ば、泉いずみは涸かれて音も無し。  
野末ふんどう遙ゆめけき森陰さかひは、裾すその界さかひの線黒すぢみ、  
不動ふどうの姿夢ゆめ重おもく、寂寞じやくまくとして眠りたり。

唯熟ひきしたる麥むぎの田たは黄金海わうこんかいと連なりて、  
かぎりも波なみだの搖蕩たゆたひに、眠るも鈍おそと嘲あざみがほ、

聖なる地の安らけき兒等の姿を見よやとて、  
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嚙み干しぬ。

また、邂逅に吐息なす心の熱の穂に出で、  
囁聲のそこはかと、鬚長頰の胸のうへ、  
覺めたる波の揺動や、うねりも貴におほどかに  
起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、  
肉置厚き喉袋、涎に濡らす傭けさ、  
妙に氣高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、  
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。

人よ、爾の心中を、喜怒哀樂に亂されて、  
光明道の此原の眞書を孤り過ぎゆかは、



追がれよ、こゝに萬物は、凡べて虚ぞ、日は燬  
かむ。

ものみな、こゝに命無く、悦も無し、はた憂  
無し。

されど涙や笑聲の惑を脱し、万象の  
流轉の相を忘ぜむと、心の渴いと切に、  
現身の世を赦しえず、はた詛ひえぬ觀念の  
眼放ちて、幽遠の大歡樂を念じなば、

來れ、此地の天日にこよなき法の言葉あり、  
親み難き炎上の無間に沈め、なが思、  
かくての後は、濁世の都をさして行くもよし、  
物の七たび涅槃に浸りて澄みし心もて。

大饑餓<sup>だいきが</sup>

夢圓<sup>まじか</sup>なる滄溟<sup>わだのはら</sup>、濤<sup>なみ</sup>の卷曲<sup>うねり</sup>の搖蕩<sup>たゆたひ</sup>に  
 夜天<sup>やてん</sup>の星の影見えて、小島<sup>をしま</sup>の群<sup>むれ</sup>と輝きぬ。  
 紫摩黄金<sup>しまわうごん</sup>の良夜<sup>あたらくよ</sup>は、寂寞<sup>じやくまく</sup>としてまた幽<sup>いう</sup>に、  
 奇<sup>く</sup>しき畏<sup>おそれ</sup>の満ちわたる海と空との原の上。

無邊<sup>むへん</sup>の天<sup>てん</sup>や無量海<sup>むりやうかい</sup>、底<sup>そこ</sup>ひも知らぬ深淵<sup>しんえん</sup>は  
 憂愁<sup>じやくわうしゆ</sup>の國、寂光土<sup>じやくくわうど</sup>、また譬<sup>たと</sup>ふべし、炫耀<sup>げんえう</sup>郷<sup>きやう</sup>。  
 墳塋<sup>おくつき</sup>にして、はた伽藍<sup>からん</sup>、赫灼<sup>かくやく</sup>として幽遠<sup>いうえん</sup>の  
 大荒原<sup>だいかうげん</sup>の縦横<sup>たてよこ</sup>を、あら、萬眼<sup>まんがん</sup>の魚鱗<sup>うろこづ</sup>や。

青空<sup>せいこくう</sup>かくも莊嚴<sup>ざうげん</sup>に、大水更<sup>だいすゐ</sup>に神寂<sup>かみさ</sup>びて、  
 大光明<sup>だいこくめう</sup>の遍照<sup>へんぜう</sup>に、宏大無邊<sup>くわうだいむへん</sup>界中<sup>かいちゆう</sup>に、

うつらうつらの夢枕、煩惱界の諸苦患も、  
こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に、粗膚の蓬起皮のしなやかに  
飢にや狂ふ、おどろしき深海底のわたり魚、  
あふささるさの徘徊に、身の鬱憂を紛れむと、  
南蠻鐵の腮をぞ、くわつとばかりに開いたる。

素より無邊天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、  
参の宿、みつ星や、三角星や天蝸宮、  
無限に曳ける光芒のゆくてに思馳するなく、  
北斗星前、横はる大熊星もなにかあらむ。

唯、ひとすぢに、生肉を噛まむ、碎かむ、割かば  
やと、

常の心は、朱に染み、血の氣に欲を湛へつゝ、  
 影暗うして水重き潮の底の荒原を、  
 曇れる眼、きらめかし、悽慘として遅々たりや。

こゝ虚なる無聲境、浮べる物や、泳ぐもの、  
 生きたる物も、死したるも、此空漠の荒野には、  
 音信も無し、影も無し。たゞ水先の小判鮫、  
 眞黒の鰭のひたうへに、沈々として眠るのみ。

行きね妖怪、なれが身も人間道に異ならず、  
 醜惡、獯猛、暴戾のたえて異なるふしも無し。  
 心安かれ、鱗ざめよ、明日や食らはむ人間を。  
 又さはいへど、汝が身も、明日や食はれむ、人  
 間に。

聖なる飢は正法の永くつゞける殺生業、  
 かげ深海も光明の天つみそらもけちめなし。  
 それ人間も、鱧鮫も、残害の徒も、餌食等も、  
 見よ、死の神の前にして、二つながらに罪ぞ無き。

「ルコント・ドゥ・リイル——『悲壯詩集』」

象ざう

沙漠さばくは丹たんの色にして、波漫まん々たるわだつみの  
音おとしづまりて、日に燬やけて、熟睡うまいの床とこに伏す如く、  
不動ふどうのうねり、大らかに、ゆくらくくらに傳つたは  
らむ、

人住むあたり銅あかすねの雲たち籠こむる眼路めぢのする。

命も音も絶えて無し。餌えはに飽きたる唐獅子からししも、  
百里の遠き洞窟ほらあなの奥にや今は眠るらむ。

また岩清水いはしみず逆さかる長沙ちやうさの央なかば、青葉あおはかげ、  
豹へうも來て飲む椰子やしりん森は、麒麟きりんが常の水かひ場。

大日輪はの走めぐせ廻る氣重き虚空こくう鞭うつて、

羽搔はがきの音の聲高き一鳥遂いつてうに飛びも來ず、  
 たまたま見たり、蟒蛇うばみの夢も熱きか圓寢まろねして、  
 とぐろの綱を動せば、鱗うろこの光まばゆきを。

一天霽いつてんはれて、そが下に、かゝる炎の野はあれど、  
 物鬱ものうつとして、寂寥せきれうのきはみを盡すをりしもあれ、  
 皺しわだむ象さうの一群いちぐんよ、太しき脚あしの練歩ねりあしに、  
 うまれの里の野を捨て、大沙原おほすなばらを横に行く。

地平のあたり、一團いくいの褐色こくしやくなして、列つらなめて、  
 みれば砂塵さぢんを蹴立けだてつゝ、路無みちき原を直道ひたみちに、  
 ゆくてのさきの障碍さまたけを、もどかしててや、力足ちからあし、  
 蹈躡たすしこふむ勢いきほひに、遠をちの砂山崩すなやまれたり。

導しるべにたてる年嵩としかさのてだれの象の全身は

「時」が噛みてし刻みてし、老樹の幹のごとひ  
われ

巨巖の如き大頭、脊骨の弓の太しきも、  
何の苦も無く自づから、滑らかにこそ動くなれ。

歩遅むることもなく、急ぎもせずに、悠然と、  
塵にまみれし群象をめあての國に導けば、  
沙の畦くろ、穴に穿ち、續いて歩むともがらは、  
雲突く修驗山伏か、先達の蹠踏でゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、  
半眼にして辿りゆくその胴腹の波だちに、  
息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散亂し、  
幾千萬の昆蟲が、うなりて集ふ餌食かな。



饑渴<sup>きかつ</sup>の攻<sup>せめ</sup>や、貪婪<sup>たんらん</sup>の羽蟲<sup>はむし</sup>の群<sup>むれ</sup>もなにかあらむ、  
 黒皺皮<sup>くろじわがは</sup>の満身<sup>まんしん</sup>の膚<sup>はだ</sup>をこがす炎暑<sup>えんしょ</sup>をや。

かの故里<sup>ふるさと</sup>をかしまだち、ひとへに夢む、道遠<sup>みちのほ</sup>き  
 眼路<sup>めぢ</sup>のあなたに生ひ茂げる無花果<sup>いちじぐ</sup>の森<sup>きん</sup>、象<sup>きさ</sup>の邦。

また忍ぶかな、高山<sup>たかやま</sup>の奥より落つる長水<sup>ちやうすゐ</sup>に  
 巨大<sup>きふ</sup>の河馬<sup>かば</sup>の嘯<sup>うそふ</sup>きて、波濤<sup>はたう</sup>たぎつる河の瀬を、  
 あるは月夜<sup>げつや</sup>の清光<sup>しろう</sup>に白みしからだ、うちのぼし、  
 水かふ岸<sup>みづあし</sup>の葦蘆<sup>よしあし</sup>を蹈み碎きてや、降りたつを。

かゝる勇猛沈勇<sup>きほみ</sup>の心をきめて、さすかたや、  
 涯<sup>きほみ</sup>も知らぬ遠<sup>をち</sup>のすゑ、黒線<sup>くろせん</sup>とほくかすれゆけば、  
 大沙原<sup>おほすなはら</sup>は今さらに不動<sup>ふどう</sup>のけはひ、神寂<sup>かみさ</sup>びぬ。  
 身動<sup>みじろきうと</sup>迂<sup>たびうと</sup>き旅人<sup>たびうじん</sup>の雲のはたてに消ゆる時。

ルコント・ドウ・リイルの出づるや、哲學に基ける厭世觀は佛蘭西の詩文に致死の棺衣を投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、單純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、此詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目するに高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドウ・ミユッセエ、ラマルティイヌの後にいで、始て詩神の雲髪を捉みて、之に倣嚴なる詩法の金櫛を加へたるが故也。彼常に「不感無覺」を以て稱せらる。世人輒もすれば、此語を誤解して曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を沒却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむをと。あらず、あらず、此暫々濫用せらる、「不感無覺」の語義を藝文の上より解する時は、單に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神祕なる歡樂を覺ゆるものから、當代の愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今、藝苑の河流を閉塞するを敬せざるのみ。尋常世態の瑣事、奚ぞよく高踏派の詩人を動さむ。されど之を倫理の方面より觀むか、人生に對する此派の態度、これより學はむとする教訓は此一言に現はる。曰く哀樂は感ず可く、歌ふ可し、而も人は斯多阿學徒の心を以て忍ばざる可からずと。かの額付、物思はしげに、長髪わざとらしき詩人等も、此語には辟易せしも多かり。されば此人は藝文に劃然たる一新機軸を出し、者にして同代の何人よりも、其詩、哲理に富み、譬喩の趣を加ふ。「カイン」「サタン」の詩二つながら人界の災殃を賦し、「イパティイ」は古代衰亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユウゴオが壯大な

る史景を咏じて、臺閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乘逸話の上に  
 敘情詩めいたる豊麗を與へたと並びて、ルコント・ドウ・リイル  
 は、傳説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。かの傳奇の老大家は歴  
 史の上に燦爛たる紫雲を曳き、この憂愁の達人は其實體を闡明す。

讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壯悲慘なる北歐思  
 想、明暢清明なる希臘田野の夢、または銀光の朧々たること、其  
 聖十字架を思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻夢涅槃の妙  
 説なりけり。

黒檀の森茂げき此世の涯の老國より來て、彼は長久の座を吾等  
 の傍に占めつ、教へて曰く、「寂滅爲樂」。

幾度と無く繰返したる大智識の教話によりて、悲哀は分類結晶  
 して、頗る靜寧の姿を得たるも、なほ、をりふしは憤怒の激發に  
 迅雷の轟然たるを聞く。是に於てか電火ひらめき、萬雷はためき、  
 人類に對する痛罵、宛も藥綫の爆發する如く、所謂「不感無覺」の  
 牆壁を破り了ぬ。

自家の理論を詩文に發表して、シオペンハウエルの辨證したる

佛法の教理を開陳したるは、此詩人の特色ならむ。儕輩の詩人皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然たるは罕なり。衆人徒に虚無を讀す。彼は明かに其事實なるを示せり。其詩は智の詩なり。而も詩趣饒かにして、坐ろにペラスゴイ、キュクロプスの城址を忍ばしむる堅牢の石壁は、かの纖弱の律に歌はれ、往々俗謠に傾ける當代傳奇の宮殿を摧かむとすなり。

「エミイル・ゾルハアレン」

珊瑚礁  
さんごせう

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の  
照しの光、亞比西尼亞、珊瑚の森にほの紅く、  
ぬれにぞぬれし深海の谷限の奥に透入れば、  
輝きにほふ蟲のから、命にみつる珠の華。

沃度<sup>ヨウド</sup>に、鹽に、さ丹<sup>に</sup>づらふ海の寶<sup>たから</sup>のもろもろは  
濡髮<sup>ぬはつ</sup>長き海藻<sup>かいさう</sup>や、珊瑚、海膽<sup>うに</sup>、苔<sup>こけ</sup>までも、  
臙脂<sup>えんじむらさき</sup>紫あかあかと、華奢<sup>くわしゃ</sup>のきはみの繪模様に、  
薄色ねびしみどり石、蝕<sup>むしば</sup>む底ぞ被<sup>おほ</sup>ひたる。

鱗<sup>こけ</sup>の光のきらめきに白珞<sup>はくはくろう</sup>瑯を疊らせて、  
枝より枝を横ざまに、何を尋<sup>たづ</sup>ぬる一大魚<sup>いちだいきぎよ</sup>、

光透入る水かげに慵げなりや、もとほりぬ。

忽ち紅火飄へる思の色の鰭ふるひ、  
 藍を湛へし静寂の、かげほのぐらき青海波、  
 水揺りうごく揺曳は、黄金、眞珠、青玉の色。

「ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ——『戦勝標』」

床<sup>とこ</sup>

さゝらがた錦を張るも、荒妙<sup>あらたへ</sup>の白布敷くも、  
悲しさは墳塋<sup>おくつき</sup>のごと、樂しさは巢<sup>す</sup>の如しとも、  
人生れ、人いの眠り、つま戀ふる、凡<sup>す</sup>べてこゝ  
なり、  
をさな兒<sup>こ</sup>も、老<sup>おい</sup>も若<sup>わか</sup>きも、さをとめも、妻も、夫も。

葬事<sup>はよりごと</sup>、まぐはひほがひ、烏羽玉<sup>うばたま</sup>の黒十字架<sup>くろじふじか</sup>に、  
淨<sup>きよ</sup>き水はふり散らすも、祝福の枝をかざすも、  
皆<sup>みな</sup>こゝに物は始まり、皆<sup>みな</sup>こゝに事は終らむ、  
産屋洩<sup>うぶや</sup>る初日影より、臨終の燭<sup>そく</sup>の火までも、

天離<sup>あまざか</sup>る鄙<sup>ひな</sup>の伏屋<sup>ふせや</sup>も、百敷<sup>も、しき</sup>の大宮内<sup>おほみやうち</sup>も、

紫摩金の榮を盡して、紅に朱に矜り飾るも、  
鈍色の櫨のつくりや、楓の木、杉の床にも。

獨り、かの畏も悔も無く眠る人こそ善けれ、  
みおやらの生れし床に、みおやらの失にし床に、  
物古りし親のゆづりの大床に足を延ばして。

「ホセ・マリヤ・デ・エレディア——『戦勝標』」



## 出征

高山の鳥栖巢だちし兄鷹のごと、  
身こそたゆまね、憂愁に思は倦じ、  
モゲルがた、パロスの港、船出して、  
雄詰ぶ夢ぞ逞ましき、あはれ、丈夫。

チパンゴに在りと傳ふる鑛山の  
紫摩黄金やわが物と遠く求むる  
船の帆も撓わりにけりな、時津風、  
西の世界の不思議なる遠荒磯に。

ゆふべゆふべは壯大の旦を夢み、  
しらぬ火や、熱帯海のかちまくら、

こがね幻まぼろし通とふらむ。またある時は

白妙しろたへの帆船ふりさけの舳へさき、たゞずみて、  
振放ふりさけみれば、雲はての果、見知らぬ空や、  
蒼海わだつみの底にひよりのぼる、けふも新星にひぼし。

「ホセ・マリヤ・デ・エレディア——『戦勝標』」  
せんしやうへう

## 夢ゆめ

夢のうちに、農人のうにん曰く、なが糧かてをみづから作れ、  
けふよりは、なを養はじ、土を墾ほり種を蒔まけよと。  
機織はたおりはわれに語りぬ、なが衣きぬをみづから織れと。  
石造いしつくりわれに語りぬ、いざ饅こてをみづから執れと。

かくて孤ひとり人間の群むれやはられて解よくに由なき  
この咒詛のろひ、身にひき纏まとふ苦しさに、みそら仰ぎて、  
いと深き憐愍あはれみ垂れさせ給へよと、禱いのりをろがむ  
眼前まのあたり、ゆくての途のたゞなかを獅子はふたぎぬ。

ほのぼのとあけゆく光、疑まなこひて眼まなこひらけば、  
雄々しかる田つくり男、梯立はしだてに口笛鳴らし、

繪具はたものの蹋木ふみきもどろ、小山田たねに種まぞ蒔きたる。

世よの幸さいちを今はた識しりぬ、人の住すまむこの現世うつしよに、  
誰たれかまた思おもひあがりて、同胞はらからを凌しのぎえせむや。  
其日そのより吾われはなべての世よの人ひとを愛あいしそめけり。

「シュリ・プリュドン——『詩集』」

信天翁 をきのたいふ

波路遙けき徒然の慰草と船人は、  
八重の潮路の海鳥の沖の太夫を生擒りぬ、  
楫の枕のよき友よ心閑けき飛鳥かな、  
奥津潮騒すべりゆく舷近くむれ集ふ。

たゞ甲板に据ゑぬればげにや笑止の極なる。  
この青雲の帝王も、足どりふらゝ、拙くも、  
あはれ、眞白き雙翼は、たゞ徒らに廣ごりて、  
今は身の仇、益も無き二つの權と曳きぬらむ。

天飛ぶ鳥も、降りては、やつれ醜き瘠姿、  
昨日の羽根のたかぶりも、今はた鈍に痛はしく、  
煙管に嘴をつゝかれて、心無には嘲けられ、

しどろの足を摸まねされて、飛行ひきやうの空に憧あこがるゝ。

雲居うんぴとの君のこのさまよ、世の歌人に似たらずや、  
暴風雨あらしを笑ひ、風凌しのぎ獵男さつをの弓をあざみしも、  
地つちの下界げかいにやはられて、勢子せこの叫わづらに煩わづらへば、  
太しき雙さうの羽根はねさへも起居たぢる妨さぐ足まとひ。

「シャルル・ボドレエル——『悪あくの華はな』」

薄暮くればたの曲きよく

時こそ今は水枝みづえさす、こぬれに花はなの顫ふるふころ、  
花は薰くんじて追風おひかぜに、不斷ふたふたの香かうの爐ろに似たり。  
句こも音おとも夕空ゆふぞらに、とうとうたたり、とうたたり、  
ワルツの舞まひの哀かなれさよ、疲れ倦うみたる眩暈くるめきよ、

花は薰くんじて追風おひかぜに、不斷ふたふたの香かうの爐ろに似たり。  
瘕きずに悩める胸むねもどき、ギオロン樂がくの清搔すがきや、  
ワルツの舞の哀かなれさよ、疲れ倦うみたる眩暈くるめきよ、  
神輿みこしの臺だいをさながらの雲かみ悲かなみて艶えんだちぬ。

瘕きずに悩める胸むねもどき、ギオロン樂がくの清搔すがきや、  
闇やみの涅槃ねはんに、痛いたましく悩なやまされたる優心やさこころ。  
神輿みこしの臺だいをさながらの雲かみ悲かなみて艶えんだちぬ、  
日ひや落お入りて溺おぼるゝは、凝こるゆふべの血潮雲ちしほぐも。

闇の涅槃<sup>ねはん</sup>に、痛ましく悩<sup>やさこ</sup>まれたる優心<sup>よろこ</sup>、  
光の過去<sup>こ</sup>のあとかたを尋<sup>と</sup>めて集<sup>あ</sup>むる憐れさよ。  
日や落<sup>お</sup>入りて溺<sup>ひ</sup>るゝは、凝<sup>こ</sup>るゆふべの血潮<sup>ちしほ</sup>雲<sup>ぐも</sup>、  
君が名残<sup>なご</sup>のたゞ在<sup>あ</sup>るは、ひかり輝<sup>せいたい</sup>く聖體<sup>せいだい</sup>盆<sup>ごふ</sup>。

「シャルル・ボドレエル——『悪<sup>あく</sup>の華<sup>はな</sup>』」



破鐘やれかね

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地爐の下に、  
燃えあがり、燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて、  
夜霧だつ闇夜の空の寺の鐘、きゝつゝあれば、  
過ぎし日のそこはかとなき物思ひやをら浮びぬ。

喉太の古鐘のどおとふるかねきけば、その身こそうらやましけれ、  
老らくの齡にもめげず、健やかに、忠なる聲の、  
何時もいつも、梵音妙ぼんのんたへに深くして、穩どかな  
るは、

陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂うつゆうのすさびごゝちに、

寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、  
覺束な、音にこそたてれ、弱聲の細音も哀れ、

哀れなる臨終の聲は、血の波の湖の岸、  
小山なす屍の下に、身動もえならで死する、  
棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。

「シャルル・ボドレエル——『悪の華』」

## 人と海

こゝろ自由なる人間は、とはに賞づらむ大海を。  
海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく、  
水や天なるゆらゆらは、うつし心の姿にて、  
底ひも知らぬ深海の潮の苦味も世といづれ。

さればぞ人は身を映す鏡の胸に飛び入りて、  
眼に抱き腕にいだき、またある時は村肝の  
心もともに、はためきて、潮騒高く湧くならむ、  
寄せてはかへす波の音の、物狂ほしき歎息に。

海も爾もひとしなみ、不思議をつゝむ陰なりや。  
人よ、爾が心中の深淵探りしものやある。  
海よ、爾が水底の富を数へしものやある。  
かくも妬げに祕事のさはにもあるか、海と人。

かくて劫初げふしよの昔より、かくて無数の歳月を、  
慈悲悔恨ゆるみの弛ゆるみ無く、修羅しゆらの戦たたかひ 酣たけなはに、  
げにも非命さつりくと殺戮さつりくと、なじかは、さまで好もしき、  
噫あ、永遠えんのすまうどよ、噫あ、怨念をんねんのはらからよ。

「シャルル・ボドレエル——『悪あくの華はな』」

梟ふくろう

黒葉水松くろは いちじゅの木下このしたやみ闇に  
並なんでとまる梟ふくろうは  
昔あかめの神をいきうつし、  
赤眼あかめむきだし思案顔。

體たいも崩くずれさず、ちつとして、  
なを思ひに暮がたの  
傾ひく日脚あしお推しこかす  
大凶時おほまがときとなりけり。

鳥のふりみて達人は  
道の悟さとや開くらむ、

世に忌々しきは煩惱と。

色相界の妄執に

諸人のつねのくるしみは  
居に安ぜぬあだ心。

「シャルル・ボドレエル——『惡の華』」

現代の悲哀はボドレエルの詩に異常の發展を遂げたり。人或は一見して云はむ、これ僅に悲哀の名を變じて鬱悶と改めしのみと、而も再考して終に其全く變質したるを曉らむ。ボドレエルは悲哀に誇れり。即ち之を詩章の龍蓋帳中に据ゑて、黒衣聖母の觀あらしめ、絢爛なること繪畫の如き幻想と、整美なること彫塑に似たる夢思とを恣にして之に生動の氣を與ふ。是に於てか、宛もこれ絶美なる獅身女頭獸なり。悲哀を愛するの甚しきは、いづれの先人をも凌ぎ、常に悲哀の詩趣を讀して、彼は自ら「悲哀の煉金道士」と號せり。

先人の多くは、惱心地定かならぬまゝに、自然に對する心中の愁訴を、自然其物に捧げて、尋常の失意に泣けども、ボドレエルは然らず。彼は都府の子なり。乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥

の悲を述べ、人に叛き世に抗する數奇の放浪兒が爲に、大聲を假したり。其心、夜に似て暗鬱、いひしらず、汚れにたれど、また一種の美、たとへば、濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄光を放つが如きもの無きにしもあらず。

「エミイル・エルハアレン」

ボドレエル氏よ、君は藝術の天にたぐひなき凄慘の光を與へぬ。即ち未だ曾て無き一の戰慄を創成したり。

「ギクトル・ユウゴオ」

譬<sup>ひ</sup>  
喩<sup>ゆ</sup>

主は讃<sup>ほ</sup>むべき哉<sup>かな</sup>、無明<sup>むみやう</sup>の闇や、憎<sup>にく</sup>多き  
今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。  
願はくは吾に與<sup>あた</sup>へよ、力と沈勇とを。  
いつまでも永く狗子<sup>いぬ</sup>のやうに従ひてむ。

生贄<sup>いけにへ</sup>の羊、その母のあと、従ひつつ、  
何の苦もなく、牧草<sup>ぼくさう</sup>を食<sup>は</sup>み、身に生<sup>お</sup>ひたる  
羊毛のほかに、その刻<sup>とき</sup>來ぬれば、命をだに  
惜<sup>をし</sup>まずして、主に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子<sup>みこ</sup>の頭字<sup>かしらじ</sup>象<sup>かたじ</sup>りもし、  
驢馬<sup>ろば</sup>ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、



はた、わが肉より穢<sup>はら</sup>ひ給ひし家<sup>あのこ</sup>を見いつ。

げに末<sup>すゑ</sup>つ世の反抗表裏の日<sup>ひ</sup>にありては  
人間よりも、畜生の身ぞ信深くて  
心素直<sup>すなは</sup>にも忍辱<sup>にんじく</sup>の道守るならむ。

『ポオル・エルレエヌ——『詩集』』

## よくみるゆめ

常によく見る夢乍ら、奇やし、懐かし、身にぞ  
染む。

曾ても知らぬ女なれど、思はれ、思ふかの女よ。  
夢見る度のいつもいつも、同じと見れば、異  
りて、

また異らぬおもひびと、わが心根や悟りてし。

わが心根を悟りてしかの女の眼に胸のうち、  
噫、彼女にのみ内證の秘めたる事を無かりける。  
蒼ざめ顔のわが額、しとゞの汗を拭ひ去り、  
涼しくなさむ術あるは、玉の涙のかのひとよ。

栗色髪の一となるか、赤髪の一とか、金髪か、  
名をだに知らね、唯思ふ朗ら細音のうまし名は、

うつせみの世を疾く去りし昔の人の呼名かと。

つくづく見入る眼差は、匠が彫りし像の眼か、  
澄みて、離れて、落居たる其音聲の清しさに、  
無言の聲の懐かしき戀しき節の鳴り響く。

『ボオル・エルレエヌ——『詩集』』

落<sup>らく</sup>  
葉<sup>えふ</sup>

秋の日の  
ギオロンの  
ためいきの  
身にしみて  
ひたぶるに  
うら悲<sup>かな</sup>し。

鐘のおとに  
胸ふたぎ  
色かへて  
涙ぐむ  
過ぎし日の  
おもひでや。

げにわれは  
うらぶれて  
こゝかしこ  
さだめなく  
とび散らふ  
落葉かな。

『ボオル・エルレエヌ——『詩集』』

佛蘭西の詩はユウゴオに繪畫の色を帶び、ルコント・ドウ・リイ  
ルに彫塑の形を具へ、エルレエヌに至りて音樂の聲を傳へ、而し  
て又更に陰影の匂なつかしきを捉へむとす。

〔譯者〕

## 良心

革衣纏へる兒等を引具して  
髪おどろ色蒼ざめて、降る雨を、  
エホバよりカインは離り迷ひいで、  
夕闇の落つるがまゝに愁然と、  
大原の山の麓にたどりつきぬ。  
妻は倦み兒等も疲れて諸聲に、  
「地に伏していざ、いのねむ」と語りけり。  
山陰にカインはいねず、夢おぼろ、  
烏羽玉の暗夜の空を仰ぎみれば、  
廣大の天眼くわつと、かしこくも、  
物陰の奥より、ひしと、みいりたるに、  
わなゝきて「未だ近し」と叫びつつ、  
倦みし妻、眠れる兒等を促して、  
もくねんと、ゆくへも知らに逃れゆく。  
かゝなべて、日には三十日、夜は、三十夜、

色變へて、風の音にもをのゝきぬ。  
やはれの、伏眼ふしめの旅は果はてもなし、  
眠ねむりなく休いこひもえせで、はろばろと、  
後の世のアシユルの國、海のほとり、  
荒磯ありそにこそはつきにけれ。「いざ、こゝに  
とゞまらむ。この世のはてに今ぞ來こし、  
いざ」と、いへば、陰雲暗きめぢのあなた、  
いつも、いつも、天眼てんがんひとと睨にらみたり。  
おそれみに身も世もあらず、戦をのきて、  
「隠せよ」と叫いっせいぶ一聲。兒等こちはただ  
猛たけき親を口に指あて眺めたり。  
沙漠さばくの地、毛織すまひの幕に住居する  
後の世のうからのみおやヤバルにぞ  
「このむたに幕ひろげよ」と命ずれば、  
ひるがへる布の高壁めぐらして  
鉛もて地に固むるに、金髪きんぱつの  
孫あけぼのむすめ曙のチラは語りぬ。  
「かくすれば、はや何も見給ふまじ」と。

「否<sup>いな</sup>なほも眼<sup>まなこ</sup>睨<sup>にら</sup>む」とカインいふ。  
 角<sup>かく</sup>を吹<sup>ふ</sup>き鼓<sup>つづみ</sup>をうちて、城<sup>き</sup>のうちを  
 ゆきめぐる民<sup>たみ</sup>草<sup>ぐさ</sup>のおやユバルいふ、  
 「おのれ今<sup>いま</sup>固<sup>かた</sup>き守<sup>まも</sup>りや設<sup>しや</sup>けむ」と。  
 銅<sup>あがね</sup>の壁<sup>かべ</sup>築<sup>つ</sup>き上<sup>あ</sup>げて父<sup>ちち</sup>の身<sup>み</sup>を、  
 そがなかに隠<sup>い</sup>しぬれども、如<sup>いか</sup>何<sup>か</sup>せむ、  
 「いつも、いつも眼<sup>まなこ</sup>睨<sup>にら</sup>む」といらへあり。  
 「恐<sup>おそ</sup>しき塔<sup>た</sup>をめぐらし、近<sup>き</sup>よりの  
 難<sup>がた</sup>きやうにすべし。砦<sup>とりで</sup>守<sup>も</sup>る城<sup>しろ</sup>築<sup>つ</sup>きあけて、  
 その邑<sup>まち</sup>を固<sup>か</sup>くもらむ」と、エノクいふ。  
 鍛<sup>か</sup>冶<sup>や</sup>の祖<sup>おや</sup>トバルカインは、いそしみて、  
 宏<sup>くわう</sup>大<sup>だい</sup>の無<sup>む</sup>邊<sup>へん</sup>都<sup>と</sup>城<sup>じやう</sup>を營<sup>えい</sup>むに、  
 同<sup>はら</sup>胞<sup>から</sup>は、セツの兒<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>、エノスの兒<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>を、  
 野<sup>の</sup>邊<sup>べ</sup>か<sup>か</sup>けて狩<sup>かり</sup>暮<sup>くら</sup>しつゝ、ある時<sup>とき</sup>は  
 旅<sup>まなこ</sup>人<sup>ひと</sup>の眼<sup>まなこ</sup>をくりて、夕<sup>ゆふ</sup>されば  
 星<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>に征<sup>せい</sup>矢<sup>や</sup>を放<sup>はな</sup>ちぬ。これよりぞ、  
 花<sup>み</sup>崗<sup>か</sup>石<sup>いし</sup>、帳<sup>とばり</sup>に代<sup>か</sup>り、くろがねを  
 石<sup>いし</sup>にくみ、城<sup>き</sup>の形<sup>かたち</sup>、冥<sup>みやう</sup>府<sup>ふ</sup>に似<sup>に</sup>たる



塔影は野を暗うして、その壁ぞ

山のごと厚くなりける。工成りて

戸を固め、壁建終り、大城戸おほきどに

刻める文字を眺むれば「このうちに

神はゆめ入る可いからず」と、ゑりにたり。

さて親は石殿せきでんに住すまはせたれど、

憂愁いうしうのやつれ姿ぞいぢらしき。

「おほち君、眼は消えしや」と、チラの問へば、

「否、そこに今もなほ在り」と、カインいふ。

「墳塋おくつきに寂しく眠る人のごと、

地の下にわれは住すまはむ。何物も

われを見じ、吾も亦何われまたをも見じ」と。

さてこゝに坑あなを穿うがてば「よし」といひて、

たゞひとり闇穴道あんけつだうにおりたちて、

物陰の座にうちかくる、ひたおもて、

地下ちげの戸を、はたと閉づれば、こはいかに、

天眼てんがんなほも奥津城おくつきにカインを眺む。

## 『ギクトル・ユウゴオ——『古今傳説集』』

ユウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にして狂飈激浪の如く  
なれど、温藉静冽の氣自から其詩を貫きたり。對聯比照に富み、  
光彩陸離たる形容の文辭を疊用して、燦爛たる一家の詩風を作り  
ぬ。

〔譯者〕

禮拜

さても千八百九年、サラゴサの戦、  
われ時に軍曹なりき。此日慘憺を極む。  
街既に落ちて、家を圍むに、  
閉ぢたる戸毎に不順の色見え、  
鐵火、窓より降りしければ、  
「憎つき僧徒の振舞」と  
かたみに低く罵りつ。  
明方よりの合戦に  
眼は硝煙に血走りて、  
舌には苦がき紙筒を  
噛み切る口の黒くとも、  
奮闘の氣はいや益しに、  
勢猛に追ひ迫り、

黒衣長袍こくい ちやうほうふち廣き帽を狙撃す。  
狭き小路きうじの行進に  
とざま、かうざま顧みがち、  
われ軍曹の任にんにしあれば、  
精兵從へ推しゆく折りしも、  
忽然こつねんとして中天赤く、  
鑛爐くもろの紅舌こうぜつさながらに、  
虐殺せらるゝ婦女の聲こゑ、  
遙かには轟々の音とよもして、  
歩毎に伏屍累々ふくし るいぐたり。  
屈こつでぐる軒下を  
出でくる時は銃劍の  
鮮血淋瀝りんりたる兵が、  
血紅に染みし指をもて、  
壁に十字を書置かきおくは、  
敵潜めるを示すなり。  
鼓つみうたせず、足重く、  
將校たちは色曇り、

さすが、手練てだれの舊ふる兵つはものも、  
落居おちこぬけはひに、寄添よそひて、  
新兵もどきの胸さわぎ。

忽たちまち、とある曲角きよくかくに、

援兵と呼ぶ佛語の一聲、

それ、戦友の危急ぞと、

驅かけつけ見れば、きたなしや、

日常ひごろは猛たけき勇士等も、

精舍しやうじやの段の前面に

たゞ僧兵の二十人、

圓頂ゑんちやうの黒鬼こつぎに、くひとめらる。

眞白の十字胸につけ、

靴無き足の凍り々しさよ、

血染かひなの腕うで巻きあげて、

大十字架にて、うちかゝる。

慘絶さんぜつ、壯絶。それと一齊射撃にて、

やがては掃蕩さうたうしたりしが、

冷然として、殘忍に、軍は倦みたり。  
皆心中に疾しくて、

とかくに殺戮したれども、

醜行已に爲し了はり、

密雲漸く散ずれば、

積みかさなれる屍より

階かけて、紅流れ、

そのうしろ樓門聳ゆ、巍然として鬱たり。

燈明くらがりに金色の星ときらめき、

香爐かぐはしく、靜寂の香を放ちぬ。

殿上、奥深く、神壇に對ひ、

歌樓のうち、やさげびの音しらぬ顔、

蕭やかに勤行營む白髮長身の僧。

噫けふもなほ涕にして浮びこそすれ、

モオル廻廊の古院、

黒衣僧兵のかばね、

天日、石だゝみを照らして、

紅流に烟たち、  
 朧々たる低き戸の框に、  
 立つや老僧。

神壇龕のやうに輝き、  
 哑然としてすくみしわれらのうつけ姿。

げにや當年の己は

空恐ろしくも信心無く、

或日精舎の奪掠に

負けし心の意氣張つよく

神壇近き御燈に

煙草つけたる亂行者、

上反鬢に氣負みせ、

一步も譲らぬ氣象のわれも、

たゞ此僧の髪白く白く

神寂びたるに畏みぬ。

「打て」と士官は號令す。

誰有て動く者無し。

僧は確に聞きたらむも、  
さあらぬ素振神々しく、  
聖水大盤を捧げてふりむく。

ミサ禮拜半に達し、

司僧むき直る祝福の時、

腕は伸べて鶴翼のやう、

衆皆一歩たじろきぬ。

僧はすこしもふるへずに

信徒の前に立てるやう、

妙音澱なく、和讃を詠じて、

「歸命頂禮」の歌、常に異らず、

聲もほがらに、

「全能の神、爾等を憐み給ふ。」

またもや、一聲あらゝかに

「うて」と士官の號令に

進みいでたる一卒は



隊中有名なうての卑怯者、  
銃執じゅうとりなほして發砲す。  
老僧、色は蒼あをみしが、  
沈勇まなこの眼明らかに、  
祈りつゞけぬ、

「父と子と。」

續いて更に一發は、  
狂氣のさたか、血迷か、  
とかくに業ごふは了をりたり。  
僧は隻腕かたうで、壇にもたれ、  
明いたる手にて祝福し、  
黄金盤わうこんばんも重たげに、  
虚空こくうに恩赦おんしやの印しるしを切りて、  
音聲おんじやうこそは微かすかなれ、  
闌げきたる堂上とほりよく、  
瞑目めいもくのうち述ぶるやう、

「聖靈と。」

かくて仆たふれぬ、禮拜らいはいの事こと了をりて。

盤ばんは三たび、床上をどに跳りぬ。

事に慣れたる老兵も、

胸おそれに鬼胎おそれをかき抱いだき

足に兵器を投げ棄てて

われとも知らず膝つきぬ、

醜行のまのあたり、

殉教僧のまのあたり。

聊爾れうじなりや「アアメン」と

うしろに笑ふ、わが隊の鼓手。

「フランソア・コペエ——『詩集』」

わすれなぐさ

ながれのきしのひともとは、  
みそらのいろのみづあさぎ、  
なみ、ことごとく、くちづけし  
はた、ことごとく、わすれゆく

「キルヘルム・アレント——『詩集』」

山<sup>やま</sup>のあなた

山のあなたの空遠く

「幸」<sup>さいはひ</sup> 住むと人のいふ。

噫<sup>あゝ</sup>、われひと、尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」<sup>さいはひ</sup> 住むと人のいふ。

「カアル・ブッセ——『詩集』」

春<sup>はる</sup>

森は今、花さきみだれ  
 艶<sup>えん</sup>なりや、五月<sup>さつき</sup>たちける。  
 神<sup>かみ</sup>よ、擁護<sup>おうご</sup>をたれたまへ、  
 あまりに幸<sup>さち</sup>のおほければ。

やがてぞ花は散りしぼみ、  
 艶<sup>えん</sup>なる時も過ぎにける。  
 神<sup>かみ</sup>よ擁護<sup>おうご</sup>をたれたまへ、  
 あまりにつらき災<sup>わざ</sup>な來<sup>こ</sup>そ。

「パウル・バルシュ——『詩集』」

秋<sup>あき</sup>

けふつくづくと眺むれば、  
 悲<sup>かなしみ</sup>の色口<sup>いろぐち</sup>にあり。  
 たれもつらくはあたらぬを、  
 なぜに心の悲める。

秋風<sup>あきかぜ</sup>わたる青木立<sup>あおこたち</sup>  
 葉なみふるひて地にしきぬ。  
 きみが心のわかき夢  
 秋の葉となり落ちにけむ。

わかれ

ふたりを「時」<sup>とき</sup>がさきしより、  
晝は事なくうちすぎぬ。  
よろこびもなく悲<sup>かな</sup>まず、  
はたたれをかも怨<sup>うら</sup>むべき。

されど夕闇おちくれて、  
星の光のみゆるとき、  
病<sup>やまひ</sup>の床<sup>とこ</sup>のちこのやう、  
心かすかにうめきいづ。

「ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル——『詩集』」

水無月 みなづき

子守歌風に浮びて、

暖かに日は照りわたり、

田の麥は足穂<sup>たりほ</sup>うなだれ、

茨<sup>いばら</sup>には紅<sup>あか</sup>き果熟<sup>み</sup>し、

野面<sup>のもせ</sup>には木の葉みちたり。

いかにおもふ、わかきをみなよ。

『テオドル・ストルム——『詩集』』



## 花<sup>はな</sup>をとめ

妙<sup>たへ</sup>に清<sup>きよ</sup>らの、あゝ、わが兒<sup>こ</sup>よ、  
つくづくみれば、そゞろ、あはれ、  
かしらや撫<sup>な</sup>でゝ、花の身の  
いつまでも、かくは清<sup>きよ</sup>らなれと、  
いつまでも、かくは妙<sup>たへ</sup>にあれと、  
いのらまし、花のわがめぐしこ。

「ハインリッヒ・ハイネ——『詩集<sup>ししよ</sup>』」

ルビンスタインのめでたき樂譜に合せて、ハイネの名歌を譯したり。原の意を汲みて餘さじと、つとめ、はた又、句讀停音すべて樂譜の示すところに従ひぬ。

「譯者」

瞻望せんぼう

怕おそるゝか死しを。――喉塞のどふたぎ、

おもわに狭霧さぎり、

深雪みゆき降り、木枯荒しれて、著しるくなりぬ、

すゑの近きさも。

夜よるの稜威みいづ暴風あらしの襲おそひ、恐おそろしき

敵たむろの屯とんに、

現身うつそみの「大畏怖だいゐふ」立たてり。しかすがに

猛たけき人は行いかざらめやも。

それ、旅りょは果みて、峯みねは盡つきて、

障礙しやうげは破やれぬ、

唯ただ、すゑの響ひびの酬むくえむとせば、

なほひと戦いくさ。

戦たかひは日ひごろの好このみ、いざゝらば、

終の晴はれの勝負せむ。

なまじひに眠まふふたぎて、赦ゆるるされて、

這はひ行くは憂うれし、

否のこり、残なく味あぢひて、かれも人なる

いにしへの猛者もさたちのやう、

矢表やおもてに立ち樂世うましよの寒冷、苦痛くるしみ、暗黒くろやみの

貢みつぎのあまり捧たてげてむ。

そも勇者やみには、忽然こつねんと禍福わざはひふくに轉まずべく

闇やみは終らむ。

四大しだいのあらび、忌々ゆるしかる羅刹らせつの怒號どがう、

ほそりゆき、雜ましりけち

變化へんげして苦くも樂らくとならむとやすらむ。

そのとき光明くわうみやう、その時御胸みむね、

あはれ、心の心とや、抱いだきしめてむ。

そのほかは神のまにまに。

出しゅつ  
現げん

苔こけむしろ、飢ゑたる岸も  
春來れば、

つと走る光、そらいろ、  
堇すみれ咲く。

村雲むらぐものしがむみそらも、

こゝかしこ、

やれやれて影はさやけし、  
ひとつ星。

うつし世の命を耻はぢの  
めぐらせど、

こぼれいつる神のゑまひか、  
君がおも。

「ロバート・ブラウニング——『クロアジックニ詩人』」

岩陰に  
いはかげ

一

嗚呼、物古りし蒼色の「地」の微笑の大きやかに、  
親しくもあるか、今朝の秋、偃曝に其骨を  
延し横へ、膝節も足も、つきいで、漣の  
悦び勇み、小躍に越ゆるがまゝに浸たりつゝ、  
さて欹つる耳もとの、さゞれの床の海雲雀、  
和毛の胸の白妙に囀ずる聲のあはれなる。

二

この教こそ神ながら舊るき眞の道と知れ。  
翁びし「地」の知りて笑む世の試ぞかやうなる。  
愛を捧げて價值あるものゝみをこそ愛しなば、

愛は完<sup>ま</sup>たき益<sup>えき</sup>にして、必<sup>かならず</sup>らずや、身の利<sup>り</sup>とならむ。  
思<sup>おも</sup>ひの痛み<sup>くるし</sup>みに、卑<sup>いや</sup>しきこゝろ清<sup>きよ</sup>めたる  
なれ自らを地に捧<sup>たも</sup>げ、酬<sup>むくひ</sup>は高き天に求めよ。

「ロバート・ブラウニング——『ジェイムズ・リーの妻』」

春はるの朝あした

時は春、

日は朝あした、

朝あしたは七時、

片岡かたをかに露みちて、

揚雲雀あげひばりなのりいで、

蝸牛枝かたつむりに這はひ、

神、そらに知しろしめす。

すべて世は事なも無し。

「ロバート・ブラウニング——『ビバの歌』」



至上善  
しじやうぜん

蜜蜂の囊にみてる一歳の香も、花も、  
寶玉の底に光れる鑛山の富も、不思議も、  
阿古屋貝映し藏せるわだつみの陰も、光も、  
香、花、陰、光、富、不思議、及ぶべしやは、  
玉よりも輝く眞、  
珠よりも澄みたる信義、  
天地にこよなき眞、澄みわたる一の信義は  
をとめごの清きくちづけ。

「ロバート・ブラウニング——『アソランドオ』」

ブラウニングの樂天説は、既に二十歳の作「ポオリイン」に顯れ、「ピパ」の歌、「神、そらにしろしめす、すべて世は事も無し」といふ句に綜合せられたれど、一生の述作皆人間終極の幸福を豫言する點に於て一致し「アソランドオ」絶筆の結句に至るまで、彼

は有神論、靈魂不滅説に信を失はざりき。此詩人の宗教は基督教を元としたる「愛」の信仰にして、尋常宗門の繩墨を脱し、教外の諸法に對しては極めて宏量なる態度を持せり。神を信じ、其愛と其力とを信じ、之を信仰の基として、人間恩愛の神聖を認め、精進の理想を妄なりとせず、藝術科學の大法を疑はず、又人心に善惡の奮闘争闘あるを、却て進歩の動機なりと思惟せり。而してあらゆる宗教の教義には重を措かず、たゞ基督の出現を以て説明すべからざる一の神祕となせるのみ。曰く、宗教にして、若し、萬世不易の形を取り、萬人の爲め、豫め、劃然として具へられたらむには、精神界の進歩は直に止りて、厭ふべき凝滯はやがて來らむ。人間の信仰は定かならぬこそをかしけれ、教法に完了といふ義ある可からずと。されば信教の自由を説きて、寛容の精神を述べたるもの、「聖十字架祭」の如きあり。殊に晩年に莅みて、教法の形式、制限を脱却すること益著るしく、全人類に亘れる博愛同情の精神愈盛なりしかど、一生の確信は終始毫も渝ること無かりき。人心の憧がれ向ふ高大の理想は神の愛なりといふ中心思想を基として、幾多の傑作あり。「クレオン」には、藝術美に倦みたる希臘詩人の永生に對する熱望の悲音を聞くべく、「ソオル」

には、事業の永續に不老不死の影ばかりなるを喜ぶ事の果敢なき夢なるを説きて、更に個人の不滅を斷言す。「亞刺比亞の醫師カアシッシュの不思議なる醫術上の經驗」といふ尺牘體には、基督教の原始に遡りて、意外の側面に信仰の光明を窺ひ、「沙漠の臨終」には神の權化を目撃せし聖約翰の遺言を耳にし得べし。然れども是等の信仰は、盲目なる狂熱の獨斷にあらず、皆冷靜の理路を辿り、若しくは、精練、微を穿てる懷疑の坩堝を経たるものにして「監督ブルウグラムの護法論」「フェリシユタアの念想」等之を證す。之を綜ぶるに、ブラウニングの信仰は、精神の難關を凌ぎ、疑惑を排除して、光明の世界に達したるものにして永生の大信は世を終るまで動かざりき。「ラ、セイジヤス」の秀才、この想を述べて餘あり、又、千八百六十四年の詩集に收めたる「瞻望」の歌と、千八百八十九年の詩集「アソランドオ」の絶筆とは此詩人が宗教觀の根本思想を包含す。

譯者

花<sup>はな</sup>くらべ

燕<sup>こ</sup>も來ぬに水仙花、  
 大寒こさむ三月の  
 風にもめげぬ凜々<sup>りん</sup>しさよ。  
 またはジュノウのまぶたより、  
 ギイナス神<sup>がみ</sup>の息<sup>いき</sup>よりも  
 なほ朧<sup>ろふ</sup>たくもありながら、  
 堇<sup>すみれ</sup>の色のおぼつかな。  
 照る日の神も仰ぎえで  
 嫁<sup>とつ</sup>ぎもせぬに散りはつる  
 色蒼<sup>いろあを</sup>ざめし櫻草<sup>さくらさう</sup>、  
 これも少女<sup>をとめ</sup>の習<sup>ならひ</sup>かや。  
 それにひきかへ九輪草<sup>くりんさう</sup>、  
 編笠<sup>あみがさ</sup>早百合<sup>ゆり</sup>氣がつよい。

百合もいろいろあるなかに、  
鳶尾草いちはつぐさのよけれども、  
あゝ、今は無し、しよんがいな。

「オリアム・シェイクスピア——『冬物語』」  
ふゆものがたり

花はなの教をしへ

心をとめて窺へば花おのづか自ら教をしへあり。  
朝露あさつゆの野薔薇のいへる、

「艶えんなりや、われらの姿、

刺とげに生おふる色香いろかとも知れ。」

麥生むぎふのひまに罌粟けしのいふ、

「せめては紅あかきはしも見よ、

そばめられたる身なれども、

験げんある露やぐすいの薬水を

盛りさゝげたる盃ぞ。」

この時、百合ゆりは追風に、

「見よ、人、われは言葉なく

法を説くなり。」

みづからなせる葉陰より、

聲<sup>こゑ</sup>もかすかに葦<sup>すみれぐさ</sup>草、

「人はあだなる香<sup>か</sup>をきけど、  
われらの示<sup>をしへ</sup>す教<sup>きょう</sup>曉<sup>あき</sup>らじ。」

「クリスティナ・ロセッティ——『詩集』」

小曲せうきよく

小曲は刹那をとむる銘文、また譬ふれば、  
過ぎにしも過ぎせぬ過ぎしひと時に、劫の「心」の  
捧げたる願文にこそ。光り匂ふ法の會のため、  
祥もなき預言のため、折からのけぢめはあれど、  
例も例も堰きあへぬ思豊かにて切にあらなむ。

「日」の歌は象牙にけづり、「夜」の歌は黒檀に  
彫り、

頭なる華のかざしは輝きて、阿古屋の珠と、  
照りわたるきらびの榮の蔭たさを「時」に示せよ。

小曲は古泉の如く、そが表、心あらはる、  
うらがねをいづれの力しらすとも。あるは

「命」の



威力あるものとめの貢、みつぎあるはまた貴に妙なるあて たへ

「戀」の供奉にかづけの纏頭と贈らむも、よし  
遮莫、さもあらばあれ

三瀬川、船はて處、陰暗き伊吹の風に、  
みつせかは

「死」に拂ふ渡のしろと、船人の掌にとらさむも。  
はら わたり

『ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ——『命の家』』

戀こひの玉座ぎよくざ

心のよしと定めたる「力」ちからかずかず、たぐへみ  
れば、

「眞」まことの唇はかしこみて「望」のぞみの眼、天仰そらあふぎ

「響」ほまれは翼、音高おとだかに埋火うづみびの「過去」くわこ 煽まなこぎぬれば

飛火とひの焰ほのほ、紅々あかくと炎上えんじやうのひかり忘却ぼうきやくの

去いなむとするを驚おどろかし、飛び翔とけるをぞ控へたる。

また後朝きぬぎぬに巻きまきし玉の柔手やはての名残なごりよと、

黄金こがねくしげのひとすぢを肩に残し、「若き世」わかよや、

「死出」しでの挿頭かざしと、例も例もあえかの花を編む

「命」いのち。

「戀」こひの玉座ぎよくざは、さはいへど、そこにしも在あじ、  
空遠そらとほく、

逢瀬<sup>あふせ</sup>、別の辻風<sup>つじかぜ</sup>のたち迷ふあたり、離<sup>さか</sup>りたる  
 夢も通はぬ遠<sup>とほ</sup>づくに、無言<sup>しごま</sup>の局奥<sup>つぼねおく</sup>深く、  
 設けられたり。たとへそれ、「眞<sup>まこと</sup>」は「戀<sup>こひ</sup>」の眞<sup>まじ</sup>  
 心<sup>こころ</sup>を  
 夙<sup>つと</sup>に知る可く、「望<sup>のぞみ</sup>」こそ、それを預言<sup>かねごと</sup>し、「譽<sup>ほまれ</sup>」こそ  
 そがためによく、「若<sup>わか</sup>き世<sup>よ</sup>」めぐし、「命<sup>いのち</sup>」惜<sup>を</sup>し  
 とも。

『ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ——『命の家』』

春の貢はる みつき

草うるはしき岸うへの上に、いと美うるはしき君が面、  
 われは横よこたへ、その髪を二つにわけてひろぐれば、  
 うら若草のはつ花も、はな白しろみてや、黄金こがねなす  
 みぐしの間ひまのこゝかしこ、面映おもはゆげにも覗のぞくらむ。  
 去年こぞとやいはむ今年とや年の境さかひもみえわかぬ  
 けふのこの日や「春」の足、半たゆたひ、小李こすもの  
 葉もなき花の白妙しろたへは雪間ゆきまがくれに迷まどはしく、  
 「春」住む庭あづまの四阿屋かよひちに風の通路かよひちひらけたり。

されど卯月の日の光、けふぞ谷間に照りわたる。  
 仰まなこぎて眼閉みづえち給へ、いざくちづけむ君が面、  
 水枝小枝みづえこえだにみちわたる「春」をまなびて、わが  
 戀よ、

温かき喉<sup>のど</sup>、熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは、  
 契<sup>ちぎり</sup>もかたきみやづかへ、戀の日なれや。冷<sup>ひや</sup>かに  
 つめたき人は永久<sup>とこしへ</sup>のやはれ人と貶<sup>ひと</sup>し憎<sup>おと</sup>まむ。

「ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ——『命<sup>いのち</sup>の家』」

心こころも空そらに

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、  
 今わが述ぶる言の葉の君の傍かたへに近づかば  
 心に思ひ給ふこと應いらへ給ひね、洩もれなくと、  
 綾あやに畏かしこき大御神「愛」の御名みなもて告げまつる。

さても星影きらゝかに、更け行く夜よるも三つ一つ  
 ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方よもは照渡てりわたり、  
 「愛」の御姿みすがたうつそ身に現あらはれいでし不思議さよ。  
 おしはかるだに、その性さがの恐おそろしく荒神あらがみも

御氣色みけしきいと麗うるはしく在いますが如くおもほえて、  
 御手みてにはわれが心しんの臓ざう、御腕おんかひなには貴あてやかに

あえかの君の寢姿を、衣うちかけて、かい抱き、

やをら動かし、交睫の醒めたるほどに心の臓、  
さゝげ進むれば、かの君も恐る恐るに聞しけり。

「愛」は乃ち馳せ走りつ、馳せ走りながら打泣  
きぬ。

『ダンテ・アリギエリ——『新生』』

鷺の歌

ほのぐらき黄金隠沼、  
骨蓬の白くさけるに、  
静かなる鷺の羽風は  
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、  
廣がりて、ころもに似たり。  
天なるや、鳥の通路、  
羽ばたきの音もたえだえ。

漁子のいと賢しらに  
清らなる網をうてども、



空翔ける奇しき翼の  
おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜をつぎて  
溝のうち泥土の底  
鬱憂の網に待つもの  
久方の光に飛ぶを。

「エミール・ゾルハアレン——『詩集』」

ボドレエルにはのめき、ゾルレアヌに現はれたる詩風はこゝに  
至りて、終に象徴詩の新體を成したり。此「鷺の歌」以下、「嗟嘆」  
に至るまでの詩は多少皆象徴詩の風格を具ふ。

譯者

法の夕のり ゆふべ

夕日の國は野も山も、その「平安」や「寂寥」の  
 黝ねづみの色けぬのの毛布ぼんぷもて掩おほへる如く、物寂さびびぬ。  
 萬物ばんぶつ凡とて整ととのふり、折りめ正しく、ぬめらかに、  
 物の象かたちも筋めよく、ビザンチン繪えの式かたちの如ごとく。

時雨しぐれ村雨むらさめ、中空なかぞらを雨あめの矢數やかずにつんざきぬ。  
 見よ、一天いつてんは紺青こんじやうの伽藍がらんの廊らうの色にして、  
 今こそ時は西山せいざんに入日にゅうにち傾かたむく夕ゆふまぐれ、  
 日の金色こんじきに烏羽玉うばたまの夜よるの白銀しろがねまじるらむ。

めぢの界さかひに物も無し、唯遠たひ長とほき並木路なみきみち、  
 路に沿したがひたる榎えんの樹きは、巨人きゆうじんの列つらの佇立たつしまひ、

疎まばらに生おふる筭はっ木きや、新にい墾ぼり小田をの末だかけて、  
鋤すき休やすめたる野のらまでも領りやうずる顔のの姿なかな。

木立こたちを見れば沙門しゃもん等らが野邊のべの送おくの營りに、  
夕暮ゆふぐがたの悲かなしみを心に痛み歩あるむこと、  
また古いにしへの六部ろくふ等らが後世ごせ安樂あんらくの願ぐわんかけて、  
靈場りやうちやう詣まうで、杖重づえく、番ばんの御寺みでらを訪まひしこと。

赤々あかくとして暮くれかゝる入日あかひの影かげは牡丹花ぼたんくわの  
眠ねれる如ごとくうつろひて、河添かはぞひ馬道めだう開ひらけたり。  
噫あゝ、冬枯ふゆがれや、法師ほふしめくかの行列ぎやうぎつを見てあれば、  
たとしへもなく静しずかなる夕ゆふの空ふたに二列にらび、

瑠璃るりの御空みそらの金砂きんすなご子こ、星輝せいける神前かみまへに  
進すすみ近きづく夕ゆふづとめ、ゆくてを照てらす星辰せいしんは

壇に捧ぐる御明の大燭臺の心にして、  
火こそみえけれ、其棹の闇浮提金ぞ隠れたる。

「エミール・ゾルハアレン——『沙門』」

## 水かひば

ほらあなめきし落窪おちくぼの、  
夢も曇るか、こもり沼ぬは、  
腹しめすまで浸ひたりたる  
まだら牡牛をうしの水かひ場ば。

坂くだりゆく牧まきがむれ、  
牛は練ねりあし、馬は跑たぐ、  
時しもあれや、落日ちくじつに  
嘯うそき吼ほゆる黄牛あめうしよ。

日のかぐろひの寂寞じやくまくや、  
色も、にほひも、日のかげも、

梢のしづく、夕榮も。  
ゆふばえ

霽は刈穂のはふり衣、  
もや かりほ  
 夕闇とざす路遠み、  
みち  
 牛のうめきや、斷末魔。

「エミール・ゾルハアレン——『弗羅曼景物詩』」  
フラマンけいぶつし

畏<sup>おそ</sup>  
怖<sup>れ</sup>

北<sup>きた</sup>に面<sup>むか</sup>へるわが畏怖<sup>おそれ</sup>の原の上に、  
牧羊<sup>かぐら</sup>の翁、神樂月角<sup>づきかく</sup>を吹く。  
物憂<sup>ひつじ</sup>き羊小舎<sup>やうぐん</sup>のかどに、すぐだちて、  
災殃<sup>まかつび</sup>のごと、死の羊群<sup>やうぐん</sup>を誘<sup>さそ</sup>ふ。

きし方<sup>かた</sup>の悔<sup>くい</sup>をもて築<sup>きづ</sup>きたる此小舎<sup>このこや</sup>は  
かぎりもなき、わが憂愁<sup>いうしう</sup>の邦<sup>くに</sup>に在<sup>あ</sup>りて、  
ゆく水のながれ薄荷<sup>めくさ</sup>荑<sup>が</sup>苳<sup>ますみ</sup>におほはれ、  
いざよひの波も重<sup>おも</sup>きか、蜘蛛<sup>くも</sup>手に澱<sup>よど</sup>む。

肩に赤十字ある墨染<sup>すみぞめ</sup>の小羊<sup>こや</sup>よ、  
色もの凄<sup>すこ</sup>き羊群<sup>やうぐん</sup>も長棹<sup>ながさ</sup>の鞭<sup>むち</sup>に

撻<sup>うた</sup>れて歸る、たづたづし、罪のねりあし。

疾風<sup>はやて</sup>に歌ふ牧羊の翁、神樂月よ、

今、わが頭<sup>かしら</sup>掠<sup>さら</sup>めし稻妻の光に

この夕<sup>ゆふ</sup>おどろおどろしきわが命かな。

「エミール・ゾルハアレン——『途上<sup>とじやうしよげん</sup>所現』」



火<sup>わ</sup>  
宅<sup>たく</sup>

嗚呼、爛<sup>らん</sup>壞<sup>ゑ</sup>せる黄金<sup>わうこん</sup>の毒<sup>どく</sup>に中<sup>あた</sup>りし大都<sup>だいと</sup>會<sup>かい</sup>、  
石<sup>いし</sup>は叫<sup>け</sup>び烟<sup>けむり</sup>舞<sup>ま</sup>ひのぼり、  
驕<sup>まろ</sup>慢<sup>やね</sup>の圓<sup>まる</sup>蓋<sup>やね</sup>よ、塔<sup>た</sup>よ、直<sup>すく</sup>立<sup>だち</sup>の石<sup>いし</sup>柱<sup>ちゆう</sup>よ、  
虛<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>は震<sup>ふる</sup>ひ、勞<sup>ろう</sup>役<sup>やく</sup>のたぎち沸<sup>わ</sup>くを、  
好<sup>この</sup>むや、汝<sup>なれ</sup>、この大<sup>だい</sup>畏<sup>い</sup>怖<sup>ふ</sup>を、叫<sup>け</sup>喚<sup>わん</sup>を、  
あはれ旅<sup>たび</sup>人<sup>ひと</sup>、  
悲<sup>かな</sup>みて夢<sup>ゆめ</sup>うつら離<sup>はな</sup>りて行<sup>い</sup>くか、濁<sup>だく</sup>世<sup>せい</sup>を、  
つゝむ火<sup>か</sup>焰<sup>えん</sup>の帶<sup>たい</sup>の停<sup>てい</sup>車<sup>しや</sup>場<sup>ばう</sup>。

中<sup>なか</sup>空<sup>そら</sup>の山<sup>やま</sup>け<sup>を</sup>た<sup>を</sup>た<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>し跳<sup>は</sup>り過<sup>を</sup>ぐる火<sup>く</sup>輪<sup>わりん</sup>の響<sup>ひびき</sup>。

な<sup>な</sup>が胸<sup>むね</sup>を焦<sup>こ</sup>す早<sup>はや</sup>鐘<sup>かね</sup>、陰<sup>かげ</sup>々と、とよもす音<sup>おと</sup>も、

この夕ゆふべ、都會ゆふべに打ちぬ。炎上の焰ほのほ、赤々、  
 千萬せんまんの火粉ひのこの光、うちつけに面おもてを照らし、  
 聲こゑ黒きわめき、さげびは、妄執やごの心の矢聲。  
 満身すべて流聖とくせいの言葉ことばに振れ、  
 意志あへなくも狂瀾はたにのまれをはんぬ。  
 實げに自らを誇りつゝ、將はた、詛のろひぬる、あはれ、人  
 の世。

## 時鐘

館の闇の静かなる夜にもなれば訝しや、  
廊下のあなた、かたことと、柵杖のおと、杖の音、  
「時」の階のあがりおり、小股に刻む音なひは  
これや時鐘の忍足。

硝子の蓋の後には、白鑽の面飾なく、  
花形模様色褪めて、時の数字もさらばひぬ。  
人の氣絶えし渡殿の影ほのぐらき朧月よ、  
これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねび聲に機のおもり、音ひねて、  
槌に鏝の音もかすれ、言葉悲しき木の函よ、  
細身の砂の指のおと、片言まじりおぼつかない  
これや時鐘の針の聲。

角なる函は櫛づくり、焦茶の色の框はめて、  
冷たき壁に封じたる棺のなかに隠れすむ  
「時」の老骨、きしきしと、數囓む音の齒ぎりや、

これぞ時鐘の恐ろしさ。

げに時鐘こそ不思議なれ。

あるは、木履を曳き悩み、あるは徒跣に音を竊み、  
忠々しくも、いそしみて、古く仕ふるはした

女か。

柱時鐘を見詰むれば、針のコムパス、身の搾木。

「エミール・ゾラハアレン——『路傍』」

黄たそ  
昏がれ

夕暮がたの蕭やかさ、燈火無き室の蕭やかさ。  
かはたれ刻は蕭やかに、物靜かなる死の如く、  
朧々の物影のやをら浸み入り廣ごるに、  
まづ天井の薄明、光は消えて日も暮れぬ。

物靜かなる死の如く、微笑作るかはたれに、  
曇れる鏡よく見れば、別の手振うれたくも  
わが倂は蕭やかににり失せなむ氣色にて、  
影薄れゆき、色蒼み、絶えなむとして消つべ  
きか。

壁に掲けたる油畫に、あるは朧に色褪めし、

框わくをはめたる追憶おもひでの、そこはかとなく留まれる  
 人の記憶きおくの圖ずの上に心こころの國くにの山水さんすいや、  
 筆ふでにゑがける風景の黒き雪かと降り積る。

夕暮ゆふぐがたの蕭しょうやかさ。あまりに物のねびたれば、  
 沈おちめる音おとの絃いしの器きに、柁かざをかけたる思おもにて、  
 無言むごんを辿たどる戀こひなかの深ふき二人ふたりの眼まなこ差さしも、  
 花毛氈まうせんの唐草からくさに絡からみて縊よる、夢心地ゆめごころ。  
 花毛氈まうせんの唐草からくさに絡からみて縊よる、夢心地ゆめごころ。

いと徐ひかりろに日ひの光ひかり隠かくるひてゆく蕭しょうやかさ。  
 文目あやめもおぼろ、蕭しょうやかに、噫あゝ、蕭しょうやかに、つくね  
 んと、

沈黙しんまの郷さとの偶座むかひあは一つひとの香かうにふた色いろの  
 匂におひまじ交まじれる思おもにて、心こころは一つ、えこそ語かたらね。

「ジョルジュ・ロオデンバッハ——『沈黙郷』」

銘しるし  
文ぶみ

夕まぐれ、森の小路こみちの四辻よつじに  
夕まぐれ、風のもなかの逍遙せうえうに、  
竈かまどの灰や、歳月さいげつに倦うみ勞つかれ來て、  
定業ぢやうごふのわが行末たすもしらま弓、  
杖たすと付ずむ。

路みちのゆくてに「日ひ」は多し、  
今更ながら、行きてむか。  
ゆふべゆふべの旅枕、  
水こえ、山こえ、夢こえて、  
つひのやどりはいづかたぞ。  
そは玄妙げんめうの、靜寧せいねいの「死し」の大神おほかみが、  
わがまなこ、閉ぢ給ふ國、

黄金わうこんの、浦安うらやすの妙たへなる封ふうに。

高榎たかがしの寂寥せきれうの森の小路よ。

岩角いけかくに懈怠けたいよろぼひ、

きり石いしに足弱あしよわ悩み、

歩ふむ毎ごと、

さしかたの血潮ちしほ流れて、

木枯こがらしの颯々さつさつたりや、高榎たかがしに。

噫あ、われ倦うみぬ。

赤楊はくのきの落葉らくえふの森の小路よ。

道行く人このはは木葉こはなす、

蒼あをざめがほの耻はぢのおも、

ぬかりみ迷ひ、群れゆけど、

かたみに避けて、よそみがち。

泥濘ぬかりみの、したりの森の小路よ、

憂愁いうしうを風は葉並はなみに囁きぬ。



しろがねの、月代つきしろの霜さゆる隠沼こもりぬは  
 たそがれに、この道のはてに澱よじみて  
 げにこゝは「鬱憂うついう」の  
 鬼おにが栖すむ國。

秦皮とねりこの、眞砂まさご、いさごの、森の小路よ、  
 微風そよかぜも足音あしおとたてず、  
 梢やまみつより梢にわたり、  
 山蜜やまみつの色よき花は  
 金色こんじきの砂子すなごの光、  
 おのづから曲れる路は  
 人さらになぞへを知らず、  
 このさきの都のまちは  
 まれびとを迎ふときゝぬ。  
 いざ足をそこに止めむか。  
 あなくやし、われはえゆかじ。  
 他しやうの生みちの途のかたはら、

「物影」の亡骸守る  
わが「願」の通夜を思へば。

高樫の路われはゆかじな、  
秦皮や、赤楊の路、  
日のかたや、都のかたや、水のかた、  
なべてゆかじな。

噫、小路、  
血やにじむわが足のおと、  
死したりと思ひしそれも、  
あはれなり、もどり來たるか、  
地響のわれにさきだつ。

噫、小路、  
安逸の、醜辱の、驕慢の森の小路よ、  
あだなりしわが世の友か、吹風は、  
高樫の木下蔭に  
聲はさやさや、

涙なみださめざめ。

あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、  
あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮く苦し、  
あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

「アンリ・ドゥ・レニエ——『夢路』」

愛あいの教をしへ

いづれは「夜」に入る人の  
 をさな心も青春も、  
 今はた過ぎしけふの日や、  
 従容として、ひとりきく、  
 「冬筆策」にさきだちて、  
 「秋」に響かふ「夏笛」を。  
 （現世にしては、ひとつなり、  
 物のあはれも、さいはひも。）  
 あゝ、聞け、樂のやむひまを  
 「長月姫」と「葉月姫」、  
 なが「憂愁」と「歡樂」と  
 語らふ聲の蕭やかさ。  
 （熟しうみたるくだもの、  
 つはりて枝や撓むらむ。）

あはれ、微風、さやさやと  
 伊吹のすゑは木枯を  
 誘ふと知れば、憂かれども、  
 けふ木枯もそよ風も  
 口ふれあひて、熟睡せり。  
 森蔭はまだ夏緑、  
 夕まぐれ、空より落ちて、  
 笛の音は山鳩よばひ、  
 「夏」の歌「秋」を揺りぬ。  
 曙の美しからば、  
 その晝は晴れわたるべく、  
 心だに優しくあらば、  
 身の夜も樂しかるらむ。  
 ほゝゑみは口のさうび花、  
 もつれ髪、鬘にゆふべく、  
 眞清水やいつも澄みたる。  
 あゝ人よ、「愛」を命の法とせば、  
 星や照らさむ、なが足を、

いづれは「夜」に入らむ時。

『アンリ・ドゥ・レニエ——田園清興』

花冠くわくわん

途のつかれに項垂うなだれて、  
默然もくぜんたりや、おもかげの  
あらはれ浮ぶわが「想」。  
命の朝のかしまだち、  
世路せいろにほこるいきほひも、  
今、たそがれのおとろへを  
透しみすれば、わなゝきて、  
顔背そむくるぞ、あはれなる。  
思ひかねつゝ、またみるに、  
避けて、よそみて、うなだるゝ、  
あら、なつかしのわが「想」。

げにこそ思へ、「時」の山、

山越えいで、さすかたや、  
 「命」の里に、もとほりし  
 なが足音もきのふかな。

さて、いかにせし、盃に  
 水やみちたる。としごろの  
 願の泉はとめたるか。

あな空手、唇乾き、

とこしへの渴に苦める  
 いと冷やき笑を湛へて、  
 ゆびさせる其足もとに、  
 玉の屑、埴土のかたわれ。

つぎなる汝はいかにせし、  
 こはすさまじき姿かな。  
 そのかみの朧たき風情、



嫋竹なよたけの、あえかのなれも、  
 鈍おそなりや、宴うたげのくづれ、  
 みだれ髪がみ、肉ししおきたるみ、  
 酒さけの香かに、衣きぬもなよびて、  
 蹈ふむ足も酔よひさまだれぬ。  
 あな忌々いし、とく去いねよ、

さて、また次つぎのなれが面おも、  
 みれば麗容れいよううつろひて、  
 悲削かなしみぞぎしやつれがほ、  
 指組ゆびくみ絞しぼり胸隠むねかくくす  
 雙さうの手振てぶりの怪あやしきは、  
 饅すえたる血ちにぞ、怨恨えんこんの  
 毒どくながすなるくち蝮ばみを  
 掩おほはむためのすさびかな。

また「驕慢」に音づれし

なが獲物をと、うらどふに、

えび染のきぬは、やれさけ、

笏の牙も、ゆがみたわめり、

又、なにものぞ、ほてりたる

もろ手ひろげて「樂欲」に

らうがはしくも走りしは。

酔狂の抱擁酷く

唇を噛み破られて、

満面に爪あとたちぬ。

興ざめたりな、このくるひ、

われを棄つるか、わが「想」、

あはれ、耻かし、このみざま、

なれみづからをいかにする。

しかはあれども、そがなかに、  
行清きたゞひとり、

きぬもけがれと、はだか身に、

出でゆきしより、けふまでも、

あだし「想」の姉妹と

道異なるか、かへり來ぬ、

——あゝ、行かばやな——汝がもとに。

法苑林の奥深く

素足の「愛」の玉容に

なれは、ゐよりて、睡みつゝ、

靈華の房を摘みあひて、

うけつ、あたへつ、とりかはし

雙の額をこもごもに、

飾るや、一の花の冠。

『アンリ・ドウ・レニエ——『墳土の圓牌』』

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤは金工の如くアンリ・ドウ・レニエは織人の如し。また、譬喩を珠玉に求めむか、彼には青玉黄玉の光輝あり、此には乳光柔き蛋白石の影を浮べ、色に曇るを見る

可<sup>べ</sup>  
し。

〔譯者〕

延<sup>の</sup>びあくびせよ

延<sup>の</sup>びあくびせよ、傍<sup>かたはら</sup>に「命<sup>いのち</sup>」は倦<sup>う</sup>みぬ、

——朝明<sup>あさけ</sup>より夕<sup>ゆふ</sup>をかけて熟睡<sup>うまい</sup>する

その臍<sup>へそ</sup>たげさ勞<sup>つか</sup>らしさ、

ねむり眼<sup>め</sup>のうまし「命<sup>いのち</sup>」や。

起きいでよ、呼<sup>よ</sup>ばゝりて、過<sup>あや</sup>ぎ行く夢<sup>ゆめ</sup>は

大影<sup>おほかげ</sup>の奥<sup>おく</sup>にかくれつ。

今<sup>いま</sup>にして躊躇<sup>ためらひ</sup>なさば、

ゆく末<sup>すえ</sup>に何<sup>なん</sup>の導<sup>しるべ</sup>ぞ。

呼<sup>よ</sup>ばゝりて過<sup>あや</sup>ぎ行く夢<sup>ゆめ</sup>は

去<sup>さ</sup>りぬ神祕<sup>くしひ</sup>に。

いでたちの旅路<sup>りょろ</sup>の糧<sup>かて</sup>を手握<sup>たにぎ</sup>りて、  
歩<sup>あゆみ</sup>もいと速<sup>はや</sup>まさる

愛の一念ましぐらに、  
 急げ、とく行け、  
 呼ばゝりて、過ぎ行く夢は、  
 夢は、また歸り來こなくに。

進めよ、走はせよ、物陰に、  
 畏おそれをなすか、深淵しんえんに、

あな、急げ……あゝ遅れたり。

はしけやし「命」は愛に熟睡うまいして、  
 拷綱たくづぬの白腕しろたてむきになれを巻く。

——噫あゝ遅れたり、呼ばゝりて過ぎ行く夢の  
 いましめもあだなりけりな。  
 ゆきずりに、夢は嘲る……

さるからに、  
 むしろ「命」に口觸れて  
 これに生うませよ、藝術を。

無言を<sup>い</sup>誇るかの夢の

教をきかで、無<sup>む</sup>邊なる神に<sup>あこ</sup>憧る事なくば、

たちかへり、色<sup>いろ</sup>よき「命」かき<sup>いだ</sup>抱き、

なれが<sup>せう</sup>利那を<sup>と</sup>長久にせよ。

死の憂<sup>うれ</sup>愁に歡樂に

靈妙<sup>れいめう</sup>音を<sup>おん</sup>生ませなば、

なが<sup>な</sup>亡き<sup>あじ</sup>後に残りゐて、

はた、さゞめかむ、はた、なかむ、

うれしの森に、春風や

若<sup>わか</sup>緑<sup>みどり</sup>、

去年<sup>こぞ</sup>を<sup>あこ</sup>繰返の愛のまねぎに。

さればぞ歌へ<sup>ほ</sup>微笑<sup>ゑん</sup>の榮<sup>はえ</sup>の光に。

「フランス・ギエレ・グリフィン——『命の光』」

伴ばん  
奏そう

白銀しろがねの筐柳はこやなぎ、菩提樹ぼだいずや、榛はんの樹きや……  
水みづの面おもに月つきの落葉おちばよ……

夕ゆふべの風ふうに櫛くしけづる丈長髪たけなががみの匂におふごと、  
夏よの夜かの薰かをりなつかし、かげ黒みづくろき湖うへの上、  
水か薰あはうみる淡海あはうみひらけ鏡かがみなす波なみのかゝやき。

楫かぢの音ともうつらうつらに  
夢ゆめをゆくわが船ふねのあし。

船ふねのあし、空そらをもゆくか、  
かたちなき水みづにうかびて。



ならべたるふたつの櫂<sup>かい</sup>は  
 「徒然<sup>つれづれ</sup>」の櫂<sup>かい</sup>「無言<sup>しじま</sup>」がい。

水の面の月影<sup>おも</sup>なして  
 波<sup>うへ</sup>の上の楫<sup>と</sup>の音<sup>と</sup>なして  
 わが胸<sup>と</sup>に吐息<sup>といき</sup>ちらばふ。

「アルベエル・サマン——『詩集<sup>ししゅう</sup>』」

賦かぞへうた

色に賞めでにし紅こう薔さう薇び、日にけに花は散りはて、  
 唐は棣ね花ず色いろよき若わか立たちも、季ときことごとくしめあへず、  
 そよそよ風の手枕たまくらに、はや日ひ敷かす經へしけふの日や、  
 つれなき北こがらしの木枯こがらしに、河氷かへいるべきながめかな。

噫あ、歡樂あよ、今さらに、なじかは、せめて争はむ。  
 知らずや、かゝる雄をたけび詔ひの、世に類たぐひ無く烏をこ鶯うなるを、  
 ゆゑだもなくて、徒いたづらに痴しれたる思、去りもあ  
 へず、

「悲哀」の琴きんの絲いとの緒をを、ゆし按あんずるぞ無む益やくなる。

＊

ゆめ、な語りそ、人の世は悦よろこびおほき宴うたげそと。  
 そは愚かしきあだ心、はたや卑ししき痴しれごち。

ことに歎なげくな、現世うつしよを涯かぎりも知らぬ苦界くがいよと。  
 益やうな無なき勇ゆうの逸氣はやりきは、たゞいち早く悔くいぬらむ。

春日霞はるひみて、葦蘆よしあしのさゞめくが如ごと、笑みわたれ。  
 磯濱いそはまかけて風騒ふうそうぎ波おとなふがごと、泣けよ。  
 一切いっさいの快樂けらくを盡つくし、一切いっさいの苦患くげんに堪かんへて、  
 豊とよの世よと稱たふるもよし、夢の世と觀かんずるもよし。

\*

死者しやのみ、ひとり吾われに聽きこく、奥津城處おくつぎじこ、わが栖家すみか。  
 世の終をふるまで、吾はしも己おのれが心のあだがつき。  
 亡恩えいぐんに榮華えいわは盡つくきむ、里鴉さとがらすはた島しまをあらさむ、  
 收穫とりのいれどき時の頼たのめなきも、吾はいそしみて種まを播まかむ。

ゆめ、自らは悲かなまじ。世の木枯みくもなにかあらむ、  
 あはれ侮蔑ぶべつや、誹謗ひぼうをや、大凶事おほまがごとの迫害せまりをや。  
 たゞ、詩の神の箏篋くごの上、指をふるれば、わが  
 樂がくの

日毎ひごとに清く澄みわたり、靈妙音れいめうおんの鳴るが樂しき。

\*

長雨空はつすの喪過はてすぎて、さすや忽たちまち薄日影、  
冠かむりの花葉はなばふりおとす栗の枝うへの上に、  
水のおもてに、遅花おそはなの花壇の上に、わが眼にも、  
照り添にほひふ匂におひなつかしき秋の日脚ひあしの白みたる。

日よ何の意ぞ、夏花なつはなのこぼれて散るも惜をしからじ、  
はた禁とどめえじ、落葉らくえふの風のまにまに吹き交かふも。  
水や曇れ、空も鈍にびよ、たゞ悲かなしみのわれに在らば、  
想おもひはこれに養はれ、心はために勇ゆうをえむ。

\*

われは夢む、滄海さうかいの天そらの色、哀深あはれき人日の影を、  
わだつみの灘なだは荒れて、風を痛み、甚振いたぶる波を、  
また思おもふ釣船つりふねの海人あまの子を、巖穴いはあなに隠かくるふ蟹を、  
青眼せいがんのネアイラを、グラウコス、プロオティウ

スを。

又思ふ、路の邊をあさりゆく物乞の漂浪人を、  
 栖み慣れし軒端がもとに、休ひるる賤が翁を、  
 斧の柄を手握りもちて、肩かゝむ杣の工を、  
 げに思ひいづ、鳴神の都の騷擾、村肝の心の  
 痕を。

\*

この一切の無益なる世の煩累を振りすて、  
 もの恐ろしく汚れたる都の憂あとにして、  
 終に分け入る森陰の清しき宿求めえなば、  
 光も澄める湖の静けき岸にわれは悟らむ。

否、寧われはおほわだの波うちぎはに夢みむ。  
 幼年の日を養ひし大搖籃のわだつみよ、  
 ほだしも波の鷗鳥、呼びかふ聲を耳にして、  
 磯根に近き岩枕汚れし眼、洗はゞや。

\*

噫、いち早く襲ひ来る冬の日、なにか恐るべき。  
 春の卯月うづきの贈物、われはや、既に盡つくし果て、  
 秋のみのりのえびかづら葡萄ぶどうも摘まず、新麥にひむぎの  
 豊とよの足穂たりほも、他あだし人ひと、刈かり干しにけむ、いつの  
 間まに。

\*

けふは照日てるひの映々はえはえと青葉高麥あをばたかむぎ生ひ茂る  
 大野おほのが上に空高く靡なびかひ浮ぶ旗雲はたぐもよ。  
 和なぎたる海を白帆あげて、朱あけの曾保船そほふね走ること、  
 變化へんげ乏しき青天あをぞらをすべりゆくなる白雲よ。

時ならずして、汝なれも亦また近づく暴風あられの先驅さきがけと、  
 みだれ姿の影黒み盛める空しがを翔かけりゆかむ、  
 嗚呼あゝ、大空の馳使はせづかひ、添はばや、なれにわが心、  
 心は汝なれに通へども、世の人たえて汲くむ者もなし。



嗟と  
嘆いき

静かなるわが妹、君見れば、想おもすおもろろぐ。  
 朽葉色くちはいろに晩秋おそあきの夢深き君が額ひたひに、  
 天人てんにんの瞳ひとみなす空色の君がまなこに、  
 憧あこがるゝわが胸は、苔古こけふりし花苑はなぞのの奥、  
 淡白あはじろき吹上ふきあげの水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨しぐれづき月、清らなる色に曇りて、  
 時節ときふしのきはみなき鬱憂うついうは池に映うつろひ  
 落葉らくえふの薄黄うすぎなる憂悶わづらひを風の散らせば、  
 いざよひの池水いけみづに、いと冷ひややき綾あやは亂れて、  
 ながながし梔子くちなしの光さす入日ひりたゆたふ。

「ステファンヌ・マラルメ——『詩集』」

物象を静観して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採



りて之<sup>これ</sup>を示したり。かるが故に、其<sup>その</sup>詩、幽妙<sup>ゆうめう</sup>を虧<sup>か</sup>き、人をして宛然<sup>えんぜん</sup>自<sup>みづか</sup>ら創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を没却するものなり。讀詩の妙は漸々<sup>やうやう</sup>遅々たる推度の裡に存す。暗示は即ち<sup>すなは</sup>これ幻想に非らずや。這般<sup>しやはん</sup>幽玄の運用を象徴と名づく。一の心狀を示さむが爲、徐<sup>おもむ</sup>に物象を喚起し、或は之と逆<sup>さか</sup>まに、一の物象を探りて、闡明<sup>せんめい</sup>數番の後、これより一の心狀を脱離せしむる事これなり。

「ステファンス・マラルメ」

白<sup>はく</sup>  
楊<sup>やう</sup>

落日の光にもゆる  
白<sup>はく</sup>楊<sup>やう</sup>の聳<sup>そび</sup>やく並木、  
谷<sup>たに</sup>隈<sup>くま</sup>になにか見る、  
風そよぐ梢より。

故國<sup>ここく</sup>

小鳥でさへも巢は戀<sup>こひ</sup>し、  
まして青空、わが國よ、  
うまれの里の波羅<sup>バラ</sup>草<sup>イソ</sup>増<sup>ソウ</sup>雲<sup>ウ</sup>。

『テオドル・オオバネル——『詩集』』

# 海のあなたうみの

海のあなたの遙けき國へ

いつも夢路の波枕、

波の枕のなくなぐぞ、

こがれ憧あこがれわたるかな、

海のあなたの遙けき國へ。

『テオドル・オオバネル——『詩集』』

オオバネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結さうけつで、十九世紀の前半に近代プロヴンス語を文藝に用ゐ、南歐の地を風靡ふうびしたるフェリイブル詩社の翹楚けうそなり。「故國」の譯に波羅葦バライソウ増雲とあるは、文祿慶長年間葡萄牙語より轉じて一時、わが日本語化したる基督きりす教法に所謂いはゆる天國の意なり。

〔譯者〕

解かい  
悟ご

頼たのみ入いりし空あだなる幸さいの一つひとだにも、忠まご心ころありて、  
とまれるはなし。

そをもふと、胸むねはふたぎぬ、悲かなにならぬ胸むねも  
にがき憂うれひに。

きしかたの犯をの罪との一つひとだにも、懲この責とを  
のがれしはなし。

そをもふと胸むねはひらけぬ、荒あ屋はらのあはれの胸むねも  
高たかき望のぞみ。

『アルトゥロ・グラフ——『美都波女』』

篠すず  
懸かけ

白波しらなみの、潮騒しほざるのおきつ貝なす  
 青緑あをみどりしげれる谿たにを  
 まさかりの眞晝まひるぞ知しす。  
 われは昔の野山の精せいを  
 まなびて、こゝに宿すからむ、  
 あゝ、神寂かみさびびし篠懸すいかけよ、  
 なれがにほひの濡髪ぬれがみに。

海<sup>かい</sup>  
光<sup>くわう</sup>

兒<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>よ、今<sup>いま</sup>晝<sup>ひる</sup>は眞<sup>ま</sup>盛<sup>さか</sup>、日<sup>ひ</sup>こゝもとに照<sup>あ</sup>らしぬ。  
寂<sup>じやく</sup>寞<sup>まく</sup>大<sup>だい</sup>海<sup>かい</sup>の禮<sup>らい</sup>拜<sup>はい</sup>して、  
天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>に捧<sup>か</sup>ぐる香<sup>かう</sup>は、  
淨<sup>きよ</sup>まはる潮<sup>うしほ</sup>のにほひ、  
轟<sup>なごり</sup>く波<sup>なみ</sup>凝<sup>やど</sup>、動<sup>うご</sup>かぬ岩<sup>いは</sup>根<sup>ね</sup>、靡<sup>なび</sup>く藻<sup>も</sup>よ、  
黒<sup>くろ</sup>金<sup>がね</sup>の船<sup>ふね</sup>の舳<sup>へ</sup>先<sup>さき</sup>よ、  
岬<sup>みさき</sup>代<sup>しろ</sup>赭<sup>いしやいろ</sup>色<sup>いろ</sup>に、獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>の蹈<sup>ふ</sup>留<sup>とど</sup>る如<sup>ごと</sup>く、  
足<sup>あし</sup>を延<sup>の</sup>べたるこゝ、入<sup>いり</sup>海<sup>うみ</sup>のひたおもて、  
うちひさす都<sup>みやこ</sup>のまちは、  
煩<sup>わづらひ</sup>悶<sup>も</sup>の壁<sup>かべ</sup>に惱<sup>なや</sup>めど、  
鏡<sup>かがみ</sup>なす白<sup>しろ</sup>川<sup>かは</sup>は蜘蛛<sup>くも</sup>手<sup>て</sup>に流<sup>なが</sup>れ、  
風<sup>ふう</sup>のみひとり、たまさぐる、  
洞<sup>ほら</sup>穴<sup>あな</sup>口<sup>ぐち</sup>の花<sup>はな</sup>の錦<sup>にしき</sup>や。

「ガブリエレ・ダンヌンチオ——」  
『讃歌』





## 解

山内義雄・矢野峰人編 岩波書店「上田敏全譯詩集」に掲載。

上田敏博士二代の業績をかえりみて、それが直接わが國の文學にあたへた影響の点から言つて最も高く評価されるべきものが譯詩の業にあつたことは今さら言うまでもないだろう。

先生が生前みずから編まれた譯詩集としては『海潮音』『牧羊神』の二巻がある。

『海潮音』の出版は明治三八年、すなわち先生が三十二歳の年である。そもそも何が先生をして譯詩の業におもむかせたか、その理由の一としては、そのころのわが國の新詩がようやく草創期をおわり、藤村、晩翠、泣菫、有明などの詩家の輩出によって輝かしい將來を約束する開花期を迎えていたという時代的背景を挙げることできるだろうが、それとならんで、この時代においておびただしい外國詩の移植がころみられ、しかもそのほとんどすべてが粗笨蕪雜なものに終始していた事実にかんがみ、みずから近代西歐詩の真諦をつたえ、当代詩壇にたいしてあやまたぬ

指標と鼓舞とをあたえようという譯者の自負と矜持きやうぢとに出たものと考え  
 ることはできないだろうか。同時に、かつて森鷗外博士が『於母影』に  
 よってわが國詩壇にはじめて藝術的新體詩の範をしめした事実を思いお  
 こし、鷗外博士にたいする敬仰の気持ちからこれに倣なづおうとした意図を  
 もうかがえるのではなからうか。『海潮音』が森鷗外博士にささげられて  
 いる所以ゆゑんを、わたくしたちは右の意味において解したい。

『海潮音』のわが國詩壇に及ぼした影響がいかに大きなものであったか  
 は敢えてここに述べるまでもないだろう。だが、事は單に、西歐近代詩の  
 真髓がこれによって傳えられたというにとどまらず、原詩の聲調を移すに  
 あたつて、古語、漢語、さらに佛典、俗語にわたつてきわめてひろい語彙  
 の選擇が行われ、とりわけわが國詩歌の根本律格たる五音七音を中心と  
 しておよそ考え得るかぎりの組み合わせがこころみられ、さらには破調、  
 自由詩形の試みさえなされているところ、まさに『海潮音』こそは、單な  
 る譯詩集にとどまらず、さらに學匠的、且つは先驅者的業績として、わが  
 國詩壇に永く記念さるべきものと言われよう。(上記傍点はなつちは編集者による。)

## 解題

山内義雄・矢野峰人編 岩波書店「上田敏全譯詩集」に掲載。

『海潮音』は明治三十八年十月、東京の本郷書院から出版された。わが國「新體詩」をして一躍「近代詩」に發達せしめるほど深甚な影響を及ぼした譯詩集ではあつたが、讀書界はまだこれを争つて讀むところまで進んでいなかったと見え、四十一年三月ようやく再版を見るにいたつた。しかも、初版に見られる誤植遺漏等、すこしも訂正されていないところから察して、初版として刷上げておいたものを、奥附だけを附けかえて製本、發売したものらしい。

ガブリエレ・ダンヌンチオ (Gabriele D'Annunzio, 1863-1938)

小『死の勝利』『快樂兒』、曲『死都』『ジョコンダ』等の作者として、わが國にもはやくから知られている。

「燕の歌」はその曲『フランチェスカ・ダ・リミニ』の中に挿入されている歌であり、アアサア・シモンズの英譯から重譯したもの。最初明治三十七年七月の竹柏園例会での講演「劇詩『フランチェスカ』」に挿入されたときの形は現在のものとは相違している。なお、この講演は、後に『文藝講話』(明治四十年刊)に収録されたが、その中に挿入されたこの詩の譯は現在の形に近い。

「聲曲」『みをつくし』(明治三十四年刊)に収められたダンヌンチオの『死の勝利』の一節「樂聲」の中に挿入されているもの。

ルコンド・ドゥ・リイル (Lecote de Lisle, 1818-1894)

譯者が「高踏派」と呼んだフランス「パルナッシャン」(詩嶽派)の首領。

「真畫」("Midi")は『古代詩集』*Poèmes antiques* (1852)から「大饑餓」("Sacra Fames")は『悲壯詩集』*Poèmes tragiques* (1884)から選ばれたもの、前者は『明星』の明治三十八年八月号、後者はその前月号に載せられた。

「象」("Les Éléphants")は『異邦詩集』*Poèmes barbares* (1862)から選ばれたものであるが、初出不明。

ホセ・マリア・デ・エレディア (José-Maria de Heredia, 1842-1905)

スペイン人の血を引く高踏派の詩人で、ソネット集『戰勝標』*Les*

*Trophées* (1893) を代表作とする。

珊瑚礁 (“Le Récif de Corail”)

床 (“Le Lit”) 「出征」 (“Les Conquérants”) 等すべての中におさめられてくる。

「出征」は明治三十八年一月、「床」は同七月、珊瑚礁」は九月、いずれも『明星』に載った。

シュリ・プリユイトン (Sully Prudhomme, 1839-1907)

佛高踏派の詩人、初期の詩は温雅にして感傷的風格をおびていたが、漸次哲學的傾向の強いものとなった。

「夢」 (“Un Songe”) は初期の『詩集』 *Stances et Poèmes* (1865) 中の一篇で、三十六年十一月の『白百合』に載った。

シャルル・ボードレール (Charles Baudelaire, 1821-1867)

詩集『惡の華』 *Les Fleurs du Mal* (1857)、散文詩集『パリの憂鬱』 *Le Spleen de Paris* (1869) の作者としてのみならず、ポーの翻譯者、文學・藝術のすぐれた評論家として重きを成し、その後の歐米文學に大きな影響を与えた。

信天翁 (“L’Albatros”) と

人と海 (“L’Homme et la Mer”) は三十八年七月の『明星』(已歳・七)に、

「破鐘」 (“La Cloche fêlée”) は九月の同誌(已歳・九)に掲載された。

「薄暮の曲」 (“Harmonie du Soir”) と

「梟」 (“Les Hiboux”) とは初出不明。

ポール・エルレエヌ (Paul Verlaine, 1844-1896)

フランス象徴派の詩人で、その作品は特に音楽性に富めることを以って知られている。

『落葉』は有名な「秋の歌」(“Chanson d'automne”)と、

「よくみるゆめ」(“Mon rêve familier”)と共に *Poèmes saturniens* (1866) から選ばれ、それぞれ三十八年六月と七月の『明星』に掲げられたもの。

『譬喩』(“Paraboles”)は詩集 *Amour* (1888) 中の一篇であるが、初出不明。

ヴィクトル・ユウゴオ (Victor Hugo, 1802-1885)

『噫無情』(レ・ミゼラブル)の作者として我國にも早くから知られているが、曲『エルナニ』の上演は、選文壇に於けるロマンティズムの確立を記念する劃期的事件だった。熱烈奔放の情念を莊重な律語に盛り、変幻自在の妙を極めた多くの詩作品によって、十九世紀最大の詩人と稱せられている。

『良心』(“La Conscience”)は『古今傳集』*La Légende des siècles* (1883) から選ばれ、譯は三十六年四月の『帝國文學』に載った。

フランソワ・コペエ (François Coppée, 1842-1908)

高踏派の一人。その初期の詩において、好んでパリ、その郊外、または田舎の下層階級の生活に取材し、それをリアリストイックな筆致で歌ったものが多かったため「貧しきものの詩人」“poète des humbles”と稱せられた。

「礼拝」(“La Bénédiction”)はその『近代詩集』*Poète modernes* (1870)から取ったもの。譯の初出は三十五年一月の『中學世界』。

キルヘルム・アレント (Wilhelm Arent, 1864-?)

ドイツの抒情詩人、その編集にかかる『近代詩人氣質』*Moderne Dichterscharaktere* (1884)は、ドイツの叙情詩に一大革命を誘導した詞華集として、文學史上重要な位置を占めて居る。

「わすれなぐさ」原題は“Vergissmeinnicht”、譯の初出は三十八年八月の『明星』。

カアル・ブッセ (Carl Busse, 1972-1918)

ドイツの抒情詩人、“Volksdichter”(民謡詩人)の名にふさわしい小品の作者。

「山のあなた」(“Über den Bergen”)は明治三十六年四月の『萬年草』に載った。

パウル・バルシュ (Paul Barsch, 1860-1931)

ドイツの詩人。短編作家・批評家としても知られている。

「春」の原題は

“Frühling” 譯詩の初出は不明。

オイゲン・クロアサン (Eugen Croissant, 1862-1918)

ドイツの抒情詩人。

「秋」の原題は“Herbst”、譯詩は前記「山のあなた」と同時に「萬年草」に載った。



ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル (Heriberte von Poschinger, 1849-?)

「ハインツ・オッセン」の筆名をもつドイツの女流作家。

「わかれ」は“Geschieden”の翻譯であり、前記「山のあなた」などと共に『萬年草』に載せられた。

テオドル・ストロム (Theodor Storm, 1817-1888)

ドイツの詩人、短編小説の作者としても知られている。その詩は、真摯純情のしらべをもって特色としている。

「水無月」は原題“Jul”で、これも亦前記『萬年草』に載せられた。

ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856)

ドイツ浪漫派の代表的詩人。多情多感の詩風を以って特に青年に強く訴えるところがあったが、本領はむしろ諷刺詩人に在ると言われている。

「花のをこめ」は詩集 *Buch der Lieder* (1827) の「帰郷篇」(Die Heimkehr) “Du bist wie eine Blume” に始まる第四十九歌であり、「音楽」第八卷第三号(明治三十八年七月)に載った。

ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-1889)

テニスンと並んでヴィクトリア朝英詩界の雙璧と稱せられる詩人。その詩は語法上難解の嫌いはあるが、劇的獨白の形を借りて人間心理の機微な推移変化を写した点に於て獨自の境を開いたと言われている。

「瞻望」“Prospect” (“Look forward” の意) は『曲中人物』 *Dramatis Personae* (1864) 中の一篇、初出不明。

「出現」は *The two Poets of Croisic* (1878) 冒頭の短章。この詩の序の部が“Apparitions”の題下に再版されたため、邦譯ではそれが採擇された。Croisic はフランスの北西部ロアール河口の港町。初出は明治三十六年二月の『萬年草』(第四号)。

「若陰に」は『曲中人物』中の“James Lee's Wife”の第七編“Among the Rocks”を譯したもの、明治三十七年二月刊行の『英文學叢誌』第一輯に「秋の」と題して發表された。

「春の朝」は三十五年十二月の『萬年草』(第三号)に載せられたものの、原詩は、曲 *Pippa passes* (1841) の第一部「朝」の中で少女ピパのうたう歌である。

「至上善」 原詩は詩集 *Asolando: Fancies and Facts* (1889) に収められた“Summum Bonum”で、明治三十六年二月の『萬年草』に「出現」と共に掲げられた。

キリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616)

『ハムレット』や『エニスの商人』によってわが國でも早くから親しまれている英國の 曲作家。

「花くらべ」は『冬物語』 *Winter's Tale* (1609?) 第四幕第三場パアディタ (Perdita) の台詞の一部を譯したもの、その試譯は明治三十六年五月發行の雑誌『青年界』所載「英詩花話」に挿入されているが、のち推敲の上、三十八年二月の『白百合』(二の四)に掲げられた。

クリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-1894)

畫家詩人ゲブリエルの妹。

「花の教」の粗稿は前記「英詩花話」にあり、のち改譯されて『白百合』の同じ号に發表された。

ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1892)

イタリヤ人である父とアイルランド人である母との間に出来た四人の兄弟姉妹の総領。畫家としては同志と結んでラファエロ前派の運動を起し、詩人としては多くのすぐれたバラッド(短い物語詩)や十四行詩を書いた。『海潮音』におさめられたものは、右のソネット集 *House of Life* 中のもの。作者がその弟に語ったところによれば、この“Life”は「生命」ではなく、「人生」を意味するものであるという。

「小曲」*House of Life* の「序詩」“Introductory Sonnet”で、邦譯の初出は明治三十五年十二月の『萬年草』(第三号)。

「戀の玉座」原題は“Love Enthroned” 初出は前詩に同じ。

「春の貢」原題は“Spring's Tribute” 初出は三十七年一月の『心の花』(七の一)。

ダンテ・アリギエリ (Dante Alighieri, 1266-1321)

もっぱら『神曲』の作者として知られている。本巻所収の詩は、終生彼が愛の対象として考えていたベアトリチェにたいするさまざまな思慕の情を歌ったもの。

「心も空に」はその中の第一篇、初出は明治三十七年十月の『中央公論』(十九ノ九)。

エミール・エルハアレン (Émile Verhaeren, 1855-1916)

ベルギーの詩人。一時近代ヨオロッパ最大の詩人とたたえられた。

「鷺の歌」は、「たとえ草」「Parabole」と題する初期の作品の譯であり、明治三十七年一月の『明星』に、譯者が特に「象徴詩」と附記して掲げたもの。翌三十八年十月刊行の『海潮音』の序文中、譯者がヴィジエ・ルコック (E. Vigie-Lecocq) が『現代詩』*La Poésie Contemporaine, 1884-1896* (1897) に於て試みたこの詩の解釈の方法を紹介するに及んで、にわかにこの風に倣<sub>な</sub>う者が多く現れたことにより、歴史的意義が深い。

「法の夕」*“Soir religieux.”* 詩集『沙門』*Les Moines* (1886) 中の一篇で、三十八年六月の『明星』に載せられた。

「水かひば」*“L'Abreuvoir.”* 著者の第一詩集 *Les Flamandes* (1883) 中の作品。初出は「法の夕」に同じ。

「畏怖」*“La Peur.”* 『途上出現』*Les Apparus dans mes chemins* (1891) 中の作品。初出は明治三十八年九月の『明星』(巳歳・九)。「火宅」譯者が『騷擾』と譯した詩集 *Les Forces tumultueuses* (1891) 中の一篇「都会」*“Les Villes.”* の部分譯で、エドモンド・グス (Edmund Gosse) が一九〇二年に執筆した短いエルハアレン論中に引用しているもの全譯である。この論文は *French Profiles* (1904) に収められていることから、譯者はおそらくこれに依つたものと思われる。邦譯の初出は「畏怖」に同じ。

「時鐘」*“Les Horloges.”* 詩集『路傍』*Au Bord de la Route* (1891) 中の一篇、初出は明治三十八年十月(巳歳・一〇)の『明星』。

ジョルジュ・ロオデンバッハ (Georges Rodenbach, 1855-1898)  
ベルギイの詩人。沈黙と滅びゆくものの悲哀とを心ゆくまで歌った。

小 『死都ブリュッセル』 *Bruges-la-Morte* (1892) も亦きわめて有名である。

「黄昏」は彼の代表的詩集『沈黙郷』 *Régnu du Silence* (1891) 中の「沈黙の草」「Du Silence」の第二篇。初出は明治三十八年十月の『明星』。

アンリ・ドゥ・レニエ (Henri de Régnier, 1864-1936)

フランスの詩人、はじめは象徴派に属していたが、後高踏派風の作風に転じた。また、その間しばらく自由詩形を試みたこともあるが、やがてこれを棄て、ふたたび格調正しい詩形に立ちもどった。「銘文」「愛の」「花冠」等、すべて明治三十八年六月の『明星』に載せられたもの。

「銘文」は原題“Exergue”、詩集『夢銘』 *Tel qu'en songe* (1892) 中の一篇。

「愛の教」“La Sagesse de l'Amour”は詩集『田園清興』 *Les Jeux rustiques et divins* (1897) 中におよめられたもの。

「花冠」“La Couronne” 詩集『墳土の田牌』 *Les Médailles d'Argile* (1900) 中の一篇。

フランシス・ギエレ・グリフィン (Francis Vielé-Griffin, 1864-1937)

アメリカ生れのフランス詩人。ホイットマンの『草の集』を佛譯し、自由詩の發達に寄与するところ大であった。

「延びあくびせよ」は詩集『命の光』 *La Clarté de la Vie* (1895) の序詩で“Etre-toi, la vie est lasse à ton côté”に始まるもの、初出不明。

アルベール・サマン (Albert Samain, 1858-1900)

フランス象徴派最後の詩人で、詩友フランソワ・コペエが「秋と黄昏の詩人」と評したが、まさに知己の言というべきだろう。詩集『王女の庭にて』*Au Jardin de l'Infante* (1893) 中の

「伴奏」*“Accompagnement”* の部分譯（九聯のうち、六、七、八聯を略している）で、初出は明治三十八年八月の『明星』。

ジャン・モレアス (Jean Moreas, 1856-1910)

ギリシャ人でありながらフランス詩人として大成した。

「賦」*“Stances”* は、詩集 *Les Stances* (1899) から抜萃譯出したもの、初出は明治三十八年九月の『明星』誌上である。

ステファンヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-1898)

フランス象徴派の代表的詩人であり、当代はもとより、後代に大きな影響を及ぼした。

「嗟嘆」*“Soupir”* は明治三十八年九月の『明星』に載った。

テオドル・オオバネル (Théodore Aubanel, 1829-1886)

南佛プロヴァンスの詩人で、フェリイブル詩社創立者の一人。「フェリイブル詩社」とは、プロヴァンス語を現代用語として復活させると共に、この地方の文藝を復興させることを目的とした七人の同志から成る結社。ここに譯出された三篇は、いずれもウィリアム・シヤブが“The Modern Troubadours”と題する評論中に譯出したものの重譯で、明治三十八年九月の『明星』に載せられた。

アルトゥロ・グラフ (Arturo Graf, 1848-1913)

ドイツ人を父とし、イタリア人を母とするイタリア詩人、「イタリアのエレディヤ」と稱せられ、その詩は古典的風格と完璧の技巧とを以て知られている。

解悟「Explicit」は詩集『迷妄』*Morgana* (1902)の巻末に据えられた短章で、おなじくシヤアプの文中に譯出されたものに拠っている。『海潮音』には、この詩が *Le Danadi* (1897)に収められているように附記してあるが、それはシヤアプの文の読み誤りによる。初出不明。

ダンヌンチオの「篠懸」<sup>すずかけ</sup>も、シヤアプの文中に譯出されているものからの重譯であり、明治三八年九月の『明星』に載せられた。原詩は『新詩集』*Canto Nuovo* (1881)中に収められた「太陽の歌」の第七歌で、シヤアプは十六節中の最初の二節だけを譯している。

「海光」は『讃歌』*Poema Paradisiaco* (1891)に拠ったとあるが、初出不明。